# 越智遺跡

－令和３年度発掘調査報告書－

2023

公益財団法人　元興寺文化財研究所

# 越智遺跡

－令和３年度発掘調査報告書－

2023

公益財団法人　元興寺文化財研究所

越智遺跡遠景空中写真（北西から）

SK006 曲物出土状況（北から）

巻頭図版 2

SD001 下層 2 出土墨書土器・転用硯

SD001 下層 2 出土製塩土器

SD001 下層 2 出土燃えさし

SD001 下層 2・SK006 出土種子

巻頭図版 4

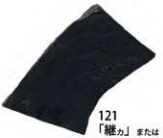
119「越」

68「器」

81「越」

123「越ヵ」

122「越」



121
「継ヵ」または「伴ヵ」

80「木」

89「木ヵ」

SD001 下層 2 出土墨書土器（奈良文化財研究所撮影）

# 序

このたび、奈良県高取町に所在する越智遺跡の発掘調査報告書が完成いたしました。

越智は『万葉集』では柿本人麻呂により「越野」や「越智野」と詠まれ、『日本書紀』には天武天皇の「越智」への行幸などに登場する地名で、さらに中世大和に一大勢力を誇った越智氏の本拠地です。越智遺跡周辺では、これまで国史跡の与楽カンジョ古墳をはじめとした与楽古墳群や越智城跡で発掘調査が行われました。

今回の発掘調査では、奈良時代に遡る大規模な「落ち込み」や中世の井戸跡がみつかりました。奈良時代の「落ち込み」からは多くの土器や木製品などが出土しており、特に「越」などと書かれた墨書土器が注目されます。ほかにも製塩土器や燃え止しなど、都城や寺院、官衙などで多く出土するものがみられ、何らかの公的な性格をもつ遺跡だったと考えられます。

飛鳥や藤原京から近い越智周辺ですが、これまであまり分からなかった奈良時代の様子が垣間見える貴重な成果といえましょう。

「文化を最大限活用して観光立国をめざす」国の方針による文化財の観光資源化の方向性は、地道な文化財の保存や調査研究の上にしか成り立ちません。現在多様な活用が行われている飛鳥地域の著名な文化財も、今回と同じく開発による緊急調査が契機となったものが大半です。より効果的な文化財の活用を図るためにも、地域の方々のご理解とご協力をいただくことが何よりも重要と感じております。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際し、多大のご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導をいただきました奈良県、高取町教育委員会をはじめ関係各位に深く感謝の意を表します。

令和５年３月31日

公益財団法人元興寺文化財研究所
理事長　辻 村 泰 善

# 例言

1. 本書は、越智遺跡において、病院改築に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県高市郡高取町与楽 1160 番地に所在し、開発面積 4,444.80㎡のうち調査対象面積は 584㎡である。
3. 調査は、医療法人中川会より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和３年８月25 日～同年 10 月 15 日を現地調査、同日～令和５年３月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は瀬戸哲也（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（同前）、白井亜美（大阪大谷大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点の設置は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は、安西工業株式会社が担当した。
7. 写真撮影について、遺構は瀬戸、墨書土器のカラー写真（巻頭図版４）は栗山雅夫（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、それ以外の遺物は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
8. 出土遺物の実測および浄書、ないし図面等の整理作業は、仲井光代、武田浩子、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した遺物の分類や記述法、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類、年代表記はこれらに依拠している。


浦蓉子 2021「奈良時代の燃えさしについて」『古代の灯火－先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

大阪府教育委員会 1978『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第 30 冊

古代の土器研究会編 1992『古代の土器（１） 都城の土器集成』

古代の土器研究会編 1996『古代の土器（４） 煮炊具・近畿編』

神野恵・森川実 2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社

神野恵 2013「都城の製塩土器」『塩の生産・流通と官衙・集落』第 16 回古代官衙・集落研究会報告書 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

積山洋 1993「律令制期の製塩土器と塩の流通－摂河泉出土資料を中心に－」『ヒストリア』第 141 号 大阪歴史学会

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

中世土器研究会編 2021『新版 概説中世の土器・陶磁器』真陽社

奈良国立文化財研究所編 1991『平城宮発掘調査報Ⅹ Ⅲ』

奈良国立文化財研究所編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』

奈良文化財研究所編 2011『平城宮発掘調査報告Ⅹ Ⅶ－第一次大極殿地区の調査２－』

奈良文化財研究所編 2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料－』

西弘海 1987『土器様式の成立とその背景』真陽社
和田一之輔 2019『木器集成図録－飛鳥藤原篇Ⅰ－』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

10. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、医療法人中川会が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は高取町教育委員会において保管している。
12. 令和４年３月12日～21日に高取町歴史研修センターで開催された文化財速報展に伴って高取町教育委員会により刊行されたパンフレット「高取の考古学Ⅴ　速報－高取の発掘調査最前線2022」では、当該調査の概要について整理時点での成果を掲載した。遺構名称や遺跡の時期や評価などについて、本書の内容を正とする。
13. 本書の執筆は、第４章第１節をバンダリ・スダルシャン（パレオ・ラボ）、同第２節を三谷智広（前同）、同第３節を藤根 久（前同）、同第４節を木沢直子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、それ以外は瀬戸が執筆した。なお、第３章第３節の墨書については、山本 崇・桑田訓也・垣中健史（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）の三氏にご教示を戴き、赤外線写真（図40）を撮影戴いた。編集は瀬戸が行い、これを芝が補佐した。
14. 発掘調査および報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を戴いた。記して感謝申し上げたい。

高取町教育委員会　木場幸弘・谷岡 樹
奈良県文化財保存課　宇野隆志・廣岡孝信
奈良県立橿原考古学研究所　岡田憲一・岡田雅彦・北山峰生・木村理恵・鶴見泰寿・米田敏幸
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　浦 蓉子・垣中健史・金田明大・栗山雅夫・桑田訓也・神野 恵・清野孝之・玉田芳英・丹羽崇史・森川 実・山本 崇
狭川真一、佐藤亜聖、山崎頼人

（敬称略、所属・個人の五十音順）

# 目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 2
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
第２章　周辺環境と既往の調査 …… 4
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 4
　第２節　周辺の遺跡と既往の調査 …… 6
　第３節　本調査の課題 …… 9
第３章　調査の成果 …… 10
　第１節　基本層序 …… 10
　第２節　遺構 …… 10
　第３節　遺物 …… 18
第４章　自然科学分析 …… 38
　第１節　越智遺跡から出土した大型植物遺体 …… 38
　第２節　越智遺跡出土の動物遺体 …… 40
　第３節　越智遺跡出土石材の岩石同定 …… 41
　第４節　越智遺跡出土木製品の樹種同定 …… 44
第５章　調査のまとめ …… 49
　第１節　遺構の変遷 …… 49
　第２節　奈良時代土器の年代と特徴 …… 51
　第３節　奈良時代における越智遺跡周辺の歴史環境 …… 55

# 図版目次


図 1　調査地位置図（S=1/200,000、1/5,000）…… 5
図 2　周辺の主な遺跡（S=1/25,000）…… 7
図 3　全体平面図（S=1/200）・トレンチ配置図（S=1/1,000）…… 11
図 4　1 区壁面土層断面図（S=1/80）…… 13
図 5　2 区壁面土層断面図（S=1/80）…… 14
図 6　SD001 土層模式図（S=1/100）…… 14
図 7　SE003 平面・立面・土層断面図（S=1/40）…… 15
図 8　SK004 平面・土層断面図（S=1/40）…… 16
図 9　SK005 平面・土層断面図（S=1/40）…… 16
図 10　SK006 平面・土層断面図（S=1/20）…… 17
図 11　SP007 平面・土層断面図（S=1/20）…… 18
図 12　SP008 平面・土層断面図（S=1/20）…… 18
図 13　SD001 出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 19
図 14　SD001 出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 20
図 15　SD001 出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 22
図 16　SD001 出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 23
図 17　SD001 出土遺物実測図（5）（S=1/3）…… 24
図 18　SD001 出土遺物実測図（6）（S=1/3）…… 25
図 19　SD001 出土遺物実測図（7）（S=1/3）…… 26
図 20　SD001 出土遺物実測図（8）（S=1/3）…… 28
図 21　SD001 出土遺物実測図（9）（S=1/3）…… 30
図 22　SD001 出土遺物実測図（10）（S=1/3）…… 31
図 23　SD001 出土遺物実測図（11）（S=1/3）…… 32
図 24　SD001 出土遺物実測図（12）（S=1/3）…… 34
図 25　SD001 出土遺物実測図（13）（S=1/3）…… 35
図 26　SE003 出土遺物実測図（S=1/3）…… 36
図 27　SK006 出土遺物実測図（S=1/3・1/5）…… 37
図 28　SP008 出土遺物実測図（S=1/3）…… 37
図 29　出土地不明遺物実測図（S=1/3）…… 37
図 30　越智遺跡から出土した大型植物遺体 …… 39
図 31　越智遺跡出土の動物遺体 …… 40
図 32　岩石試料の外観（a）と実体顕微鏡写真（b）…… 41
図 33　遺跡と周辺の地質 …… 43
図 34　木材組織顕微鏡写真（1）…… 46

図 35　木材組織顕微鏡写真（2）…… 47
図 36　調査地周辺の旧地形図（S=1/10,000）…… 49
図 37　遺構変遷図（S=1/300）…… 50
図 38　奈良時代の土器・供膳具（S=1/4）…… 52
図 39　土師器供膳具径高分布 …… 52
図 40　越智遺跡出土墨書土器 …… 54
図 41　越智遺跡周辺の歴史環境（S=1/6,000）…… 55
図 42　検出遺構配置略図（S=1/250）…… 59

# 表目次

表 1　越智遺跡から出土した大型植物遺体…… 38
表 2　モモ核の大きさ …… 39
表 3　越智遺跡出土動物遺体の同定結果 …… 40
表 4　分析試料とその特徴…… 41
表 5　樹種同定対象資料 …… 44
表 6　SD001 下層 2 出土土器集計 …… 52
表 7　報告遺物一覧（1）…… 60
表 8　報告遺物一覧（2）…… 61
表 9　報告遺物一覧（3）…… 62
表 10　報告遺物一覧（4）…… 63
表 11　報告遺物一覧（5）…… 64
表 12　報告遺物一覧（6）…… 65
表 13　報告遺物一覧（7）…… 66
表 14　検出遺構および出土遺物一覧 …… 66

# 写真目次

写真 1　空中写真撮影状況…… 3
写真 2　SD001 下層遺物採取状況 …… 3
写真 3　調査地近景と葛城山（東から）…… 4

# 写真図版目次


巻頭図版 1
　越智遺跡遠景空中写真（北西から）
　SK006 曲物出土状況（北から）
巻頭図版 2
　SD001 下層 2 出土墨書土器・転用硯
　SD001 下層 2 出土製塩土器
巻頭図版 3
　SD001 下層 2 出土燃えさし
　SD001 下層 2・SK006 出土種子
巻頭図版 4
　SD001 下層 2 出土墨書土器
図版 1
　調査区全景空中写真（上が北）
　1 区全景空中写真（上が北）
図版 2
　調査前風景（北から）
　1 区調査区設定状況（南から）
図版 3
　SD001 検出状況（北から）
　SD001 検出状況（西から）
図版 4
　SD001 南壁土層断面（北から）
　SD001 西壁土層断面（東から）
図版 5
　SD001 下層確認トレンチ全景（北から）
　SD001 下層確認トレンチ北壁土層断面（南から）
図版 6
　SD001 下層確認トレンチ西壁土層断面（東から）
　SD001 下層確認トレンチ北壁東側土層断面（南から）
図版 7
　SD002 検出状況（南から）
　SD002 南壁土層断面（北から）
図版 8
　SE003 検出状況（南から）
　SE003 全景（南から）
図版 9
　SE003 石組南側（北から）
　SE003 石組断ち割り（南から）
図版 10
　SK004 土層断面（南から）
　SK004 完掘状況（南から）
図版 11
　SK005 土層断面（南から）
　SK006 曲物検出状況（北から）
図版 12
　SK006 曲物内堆積状況（東から）
　SK006 掘り下げ状況（北から）
図版 13
　SK006 掘り下げ状況（北東から）
　SP008 土層断面（南から）
図版 14
　SD001 西壁側溝、上層、上・中層出土遺物
図版 15
　SD001 上・中層出土遺物
図版 16
　SD001 中・下層、下層出土遺物
図版 17
　SD001 下層、下層 2 出土遺物
図版 18 ～ 26
　SD001 下層 2 出土遺物
図版 27
　SD001 下層 2、SE003、SK006 出土遺物

# 第１章　調査に至る経緯と調査体制

## 第１節　調査に至る経緯

令和３年５月25日付けで医療法人中川会（以下、事業者）より病院改築に伴う埋蔵文化財発掘の届出が出され、奈良県文化財保存課（以下、奈良県）により同年７月１日付け文保第2574号にて発掘調査の実施が指示された。高取町教育委員会（以下、高取町）は事業者との協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、奈良県に相談の上、公益財団法人元興寺文化財研究所（以下、当研究所）へ発掘調査を依頼することとなった。

これを受けて、奈良県から令和３年８月13日に文保328-2号で発掘調査依頼を受けた当研究所は、越智遺跡発掘調査業務として事業者と同年８月16日付けで委託契約を交わした。なお、病院改築に影響を受ける範囲は当初1,000㎡を予定していたが、調査期間や予算等の制約から高取町の指導のもと事業者と協議し、調査面積を600㎡と計画した。契約締結後、当研究所は作業員派遣・重機等器材リースは株式会社安西工業、調査区設定や空中写真測量は株式会社文化財サービスに外注するなどの調査準備を速やかに行った。

令和３年８月16日に発掘調査届出を提出のうえ、同８月25日から現地調査を開始した。改築建物の予定地は現況がグラウンドであったが、その北縁が人為的に削平されたと思われる崖となっていた。そこで遺跡の残存状況を確認するために、南北方向のサブトレンチを入れた。それによりグラウンドの北側が大きく削平されていることを確認したので、その南側を中心に544㎡の調査区を設定することになった（１区）。また、西側の地下タンク工事範囲については掘削深度が3m近くに及ぶとのことから、高取町の指導によりその影響範囲に40㎡の調査区を設定した（２区）。調査面積は合計584㎡であった（図3）。

発掘調査の結果、１区において遺構は古代～中世の落ち込みや井戸を確認し、遺物では多くの奈良時代の土器、墨書土器や多様な木製品が出土した。落ち込みが検出された範囲では2.5mまで掘り下げた時点でも底面の確認はできなかったが、改築工事に影響があるということからこれより地下の掘削は行わなかった。

現地調査は令和３年10月15日に終了し、同日付で奈良県に発掘調査終了報告、橿原警察署長にコンテナ11箱の遺物について埋蔵文化財発見届を提出した。また事業者と現地調査後の経費について変更契約を行った上で、整理・報告書作成業務に移行した。さらに高取町の要望を受けて、令和４年３月12日～21日に高取町歴史研修センターで開催された文化財速報展「高取の考古学Ⅴ　速報－高取の発掘調査最前線2022」において、整理中の出土遺物や調査の概要をまとめたパネルの展示を行い、文化財の一般公開へ協力・貢献を行った。

現地調査から報告書作成に至る間、事業者の支援・協力と共に、奈良県、高取町からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することができた。関係各位に感謝する次第である。

## 第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県文化財保存課・高取町教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

研究員　村田裕介

研究員　坂本　俊

研究員　瀬戸哲也（現地調査担当）

技　師　江浦　洋

現地作業員：株式会社安西工業

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理報告）

調査指導：奈良県文化財保存課・高取町教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　山田哲也

文化財調査修復研究グループ

統括マネージャー　雨森久晃

主　務　　村田裕介

研究員　　坂本　俊

研究員　　瀬戸哲也（整理報告担当）

技　師　　江浦　洋

## 第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和３年

８月25日（水）　調査開始。調査区北側より重機掘削。表土が厚く、地表下1m前後で地山確認。高取町教育委員会文化財担当の木場幸弘氏による立会。

８月26日（木）　調査区北側と東側で地山確認。西側で少量の遺物包含層を確認。木場氏の現地確認。

8 月 27 日（金）　北壁の側溝で西側の遺物包含層はグライ化した谷状の堆積と判断。

8 月 30 日（月）　高取町の指示により事業者の承諾を得て、地下タンクの設置予定範囲においても調査対象とすることを決定。今までの調査区を 1 区、地下タンク範囲を 2 区とする。

8 月 31 日（火）　1 区の重機掘削終了、グリッド設定、人力での掘削面清掃。2 区の重機掘削を開始。

9 月 1 日（水）　2 区の重機掘削を終了、南壁断面実測。1 区と同様なグライ化土壌を確認。

9 月 6 日（月）　週末の雨により調査区が水没。1 区の西側で谷部の肩を検出し（S-1、報告時 SD001）、その埋土を上層が中世、中層・下層が古代と想定。

9 月 7 日（火）　1 区の S-1 の埋土を南西側より掘削、上層では中世の瓦器椀、土師皿が出土。2 区で谷部の肩を確認し（S-2、報告時 SD002）、埋土から中世～近世の遺物が出土。

9 月 8 日（水）　S-1 の L2 で中層掘削中に石組の井戸（S-3、報告時 SE003）を検出。検出面が上層に相当する可能性。1 区北側、2 区の平面測量。

9 月 13 日（月）　S-1 の北西・中央側の上・中層を掘削。

9 月 16 日（木）　S-1 の J3・4 付近の下層上面で 2m の略方形の土坑（S-4、報告時 SK004）を検出。

9 月 22 日（水）　S-1 上･中層の掘削が終了し、全体的に下層が検出。この検出レベルを最終面とする。

9 月 24 日（金）　S-1 下層の掘削中に曲物が据えられたような状況で出土（S-6、報告時 SK006）。

9 月 28 日（火）　S-6 の曲物内を半截したところ、底板はなく素掘りで埋めたものと思われる。

9 月 30 日（木）　地山面の清掃 9 割終了。

10 月 4 日（月）　来週の空中写真に備えた清掃を終了。木場氏が現地確認。大阪大谷大学の狭川真一氏の現場見学。

10 月 5 日（火）　足場からの全景写真。空中写真、オルソ測量（写真 1）。S-1 北側で重機により下層確認トレンチを掘削し、古代の遺物が出土したが、地表下 2.5m でも地山確認できず。

10 月 6 日（水）　S-1 の下層確認トレンチを 5 × 10m に拡張。S-3 の石組を重機により半截したが、検出面より下 1.7m の地点でも地山確認できず。

10 月 7 日（木）　S-1 の下層確認トレンチについて、事業者よりこれ以上の掘削は、建築基礎に影響があるとの指摘を受けたため、掘削作業を終了。確認トレンチ（下層 2）の遺物は概ね奈良時代のもので、「越」「器」と書かれた墨書土器などが出土。この土からの遺物採取を 12 日まで行った（写真 2）。

10 月 8 日（金）　S-6 の曲物を取り上げ。

10 月 12 日（火）　作業員派遣の終了。S-1 の土壌サンプリング。以後、図面・遺物の確認整理。

10 月 15 日（金）　出土遺物、道具の運搬を行い、調査終了。事業者及び高取町へ調査終了を報告。

**写真 1　空中写真撮影状況**

**写真 2　SD001 下層遺物採取状況**

# 第２章　周辺環境と既往の調査

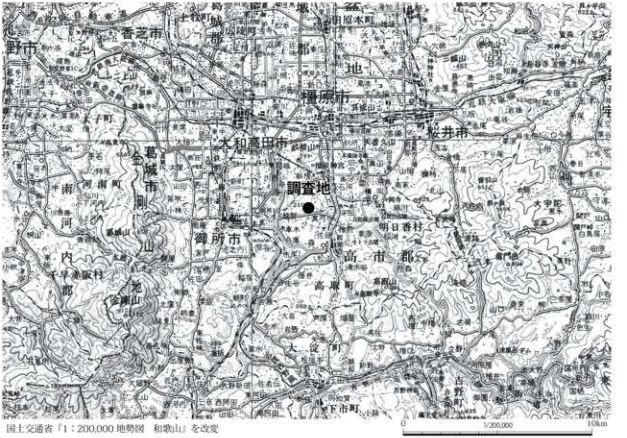
## 第１節　遺跡の立地と環境

調査地は、奈良県高市郡高取町与楽 1160 番地に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である越智遺跡に位置する（図 1）。高取町は、奈良県北部の奈良盆地南縁付近を占め、その面積約 25.8㎢、総人口 6,287 人（2023 年 1 月現在）、隣接する橿原市や御所市の郊外にあたる。

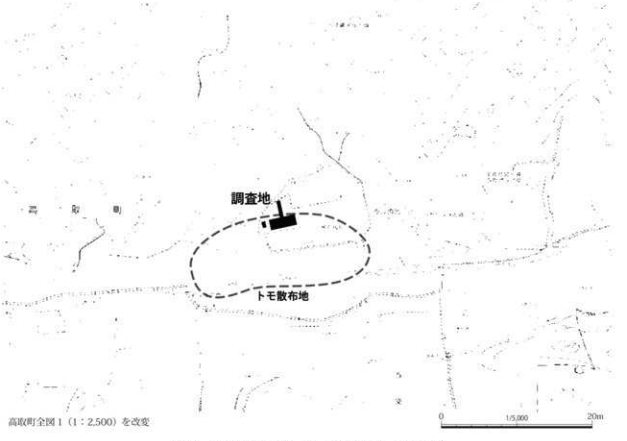
高取町の地形は、北側が明日香・巨勢丘陵、南側が龍門山地という山間部が大半を占めている。調査地は、標高約 209m の貝吹山を最高所とする丘陵南側に派生する尾根筋の先端部にあたり、その南側に東西方向に越智谷と称される谷底平野が延びている。越智遺跡は、この貝吹山南麓一帯に東西に細長く分布範囲が設定されており、越智城跡を中心とした主に中世の遺跡として想定されている。なお、調査区からは西に延びる尾根の木々で直接は見えないが、すぐ南側の東西方向の谷筋からは、西方に葛城山を望むことができる（写真 3）。周辺の地質は、一帯の丘陵は花崗岩類とされ、谷は礫がちの堆積物とされる。周辺の現状としては、尾根には木々が生い茂り、谷筋は田畑に利用されている。近接して南に与楽、東に寺崎の集落が共に約 500m 離れてみられ、谷奥に固まって形成されている。

越智の地名は、『万葉集』での柿本人麻呂の歌に記される「越野」「越智野」、『日本書紀』での斉明天皇を葬った「小市岡上陵」や天武天皇が「越智」へ行幸した記事などから、飛鳥時代に遡るものとされる。後節で述べるように、高取町周辺では越智を含め、真弓や佐田、桧前などの各丘陵において、天皇・皇子などの陵墓に比定または推測される古墳が多く分布している。「越智野」を調査地一帯の貝吹山南麓の平坦地とする見解もある（和田 2005）。現在の飛鳥駅周辺は明日香村字越であるなど、当時の「越智」の範囲については確定するには至っていない。また、『続日本紀』の延暦 2（783）年に「越智池」を築いた功により贄田物部首年足が外従五位下を与えられたとあるが、その所在も定かにされていない。

**写真 3　調査地近景と葛城山（東から）**




国土交通省「1：200,000 地勢図　和歌山」を改変




高取町全図１（1：2,500）を改変

図１　調査地位置図（S=1/200,000、1/5,000）

鎌倉時代ごろには、「越智郷」「南越智庄」などの地名が文書史料に登場してくる。越智を本拠とする越智氏は、その由来には諸説あるが、南北朝期には筒井氏とならぶ大和の有力者となったとされる。室町時代には、両氏を中心とした大和永享の乱、応仁・文明の乱などの抗争が繰り広げられた。明応年間の越智家栄が越智氏の全盛期とされ、その支配権は高市郡から葛上郡に及んだ。だが天文年間に入って高取城や貝吹山城が落城するなど、筒井氏に圧迫されるようになった。天正 8（1580）年には織田信長の命令によって、筒井順慶の与力となり差出検地に応じた。天正 11（1583）年、越智家秀は家臣によって殺害され、筒井氏重臣の松蔵氏が越智へ入ったことから、中世大和の一大勢力を誇った越智氏は滅亡した。

江戸時代には、越智周辺は越知村として高取藩領下となり、その拠点となった高取城には本多氏、その後植村氏が入った。文久 3（1863）年に高取藩は天誅組の攻撃を撃退させた。明治 4（1871）年の廃藩置県で高取県となった。明治の町村制では越智は越智岡村に含まれ、戦後には隣接した船倉村と共に合併して高取町の一部となった。現在の高取町は、明治以来盛んであった製薬業を中心に、豊かな自然を生かした農林業、壺阪寺や高取城などの史跡を中心とした観光業にも力を入れている。

## 第 2 節　周辺の遺跡と既往の調査

越智遺跡は越智谷に沿った貝吹山南麓の一帯とされ、範囲内の西方に位置する越智城跡を中心とした中世の遺跡として認識されていた。調査地は越智遺跡の範囲では東方寄りにあたり、200m 東側の尾根先端には与薬カンジョ古墳が位置している。調査地の南側一帯は、奈良県遺跡地図 17A-0580 の範囲が括られ、かつては「トモ散布地」と称され（高取町・橿考研 1989）、弥生時代～中世の遺物散布地とされていた（図 1）。今回の調査地であるグラウンドの南側に隣接する旧病棟の範囲は、高取町教育委員会の発掘調査によって主に中世の遺構・遺物が確認されている。以下、周辺の遺跡について時代順に記述する（図 2）。

1. 越智遺跡
2. 越智城跡
3. 与薬カンジョ古墳
4. 与薬ヲギタ遺跡
5. 寺崎白壁塚古墳
6. 与薬鑵子塚古墳
7. 与薬古墳群
8. 寺崎西辰巳遺跡
9. 車本ケンノウ古墳
10. 川西根成柿遺跡
11. 宮ノ前遺跡
12. 萩之本遺跡
13. 一町西遺跡
14. 観音寺本馬遺跡
15. 観音寺遺跡
16. 本馬丘遺跡
17. 東寺田遺跡
18. 一町遺跡
19. 千塚山遺跡
新沢千塚古墳群
20. 長法寺城跡
21. 上ノ山遺跡
22. 鳥屋遺跡
23. 鳥屋ミサンザイ古墳
24. 鳥屋城跡
25. 桝山古墳
26. 貝吹山城跡
27. 益田池跡
28. 久米寺跡
29. 久米ジカミ子遺跡
30. 丈六北遺跡
31. 丈六南遺跡
32. 軽寺跡
33. 善導寺山遺跡
34. 見瀬丸山古墳
35. 見瀬城跡
36. 岩屋山古墳
37. 真弓鑵子塚古墳
38. 牽牛子塚古墳
39. 越塚御門古墳
40. カヅマヤマ古墳
41. マルコ山古墳
42. 城の口城跡
43. 東明神古墳
44. 佐田城跡
45. 佐田遺跡群
46. 森カシ谷遺跡
47. 松前・上山遺跡
48. 観覚寺遺跡
49. 森ヲチヲサ遺跡
50. 下土佐遺跡
51. 清水谷ナルミ遺跡
52. 松山呑谷城跡
53. 松山竹谷遺跡
54. 松山遺跡
55. 東中谷遺跡
56. 松山城跡
57. 薩摩遺跡
58. 羽内ウジナミ 1 号墳
59. 羽内遺跡
60. 藤井城跡
61. 市尾墓山古墳
62. 宮塚古墳
63. 高台・峯寺瓦窯
64. 曽羽城跡
65. 市尾小谷古墳
66. 丹生谷城跡
67. 玉手城跡
68. 披上鑵子塚古墳
69. 今住遺跡
70. 国見山城跡

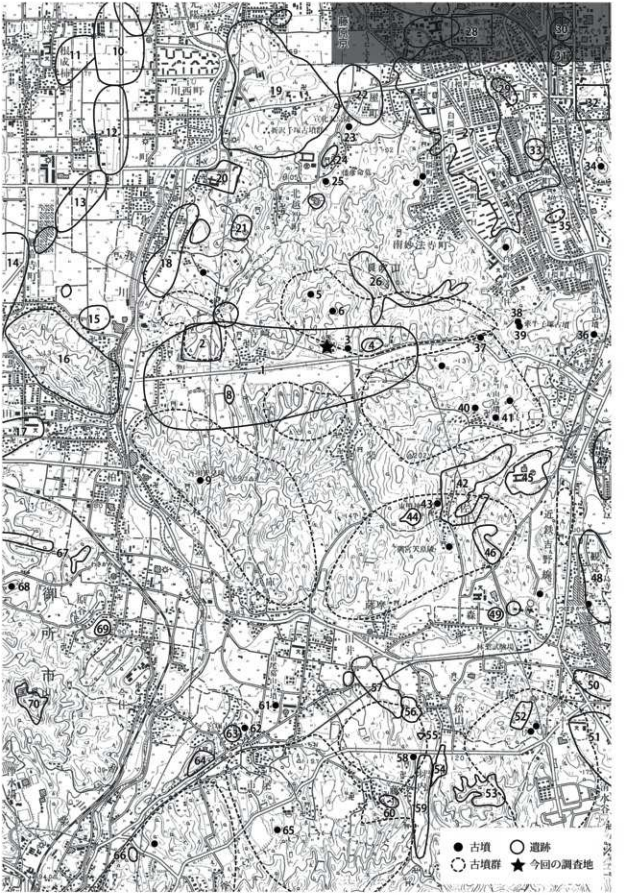



図２　周辺の主な遺跡（S=1/25,000）

**旧石器・縄文時代**　当該地域では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代では、橿原市域の平坦な沖積地に位置する観音寺本馬遺跡（14）で草創期の有茎尖頭器、前～中期の土器もみられるが、後期から晩期にかけて建物や墓、水場などが確認されている。高取町域では越智城跡(2)や薩摩遺跡(57)で縄文土器、寺崎西辰巳遺跡（8）で石鏃が共に少量出土している。

**弥生時代**　橿原市域では川西根成柿遺跡（10）で前期の環濠集落、萩之本遺跡（12）で同時期の水田跡、一町西遺跡（13）で前～後期の水田跡などのほか、曽我川西岸の沖積地や台地で大規模かつ多くの遺跡が分布する。一方、高取町域では薩摩遺跡で中期の方形周溝墓や木棺墓が確認され、寺崎西辰巳遺跡で後期土器が出土しているが、やはり山間部では遺跡数は少なく、その規模も小さい印象がある。

**古墳時代**　弥生時代終末期から古墳時代初頭の薩摩遺跡では、前期の竪穴建物を主体とする集落と方墳を中心とした古墳群が確認されている。ただ、この時期の遺跡は当該地域にはあまりみられない。

中期から後期には、薩摩遺跡に近接する森カシ谷遺跡（46）、観覚寺遺跡（48）、森ヲチヲサ遺跡（49）、清水谷ナルミ遺跡（51）、羽内遺跡（59）などでは、大壁建物と称される特徴的な遺構がみられる集落が多く調査されている。この建物は方形に巡る細い溝に柱穴が密に並び土壁建ちとされ、床面に長い煙道を有するオンドル状遺構がみられるものもあり、渡来系氏族またはその影響が強いものとされている。

中期古墳は、当該地域西方の御所市域では墳長238mの室宮山古墳が大型前方後円墳として有名で、比較的近い披上鑵子塚古墳（68）はこれに次ぐものとされるが、当該地域は全体的に少ない。中期後半になると、薩摩古墳群、新沢千塚古墳群（19）などのいわゆる初期群集墳が一部の丘陵で形成される。後期には、墳長70mの前方後円墳である大型前方後円墳である市尾墓山古墳（61）が造られ、高取町域では最も大型のものである。この古墳は横穴式石室をいち早く採用されたとされ、後続する古墳として宮塚古墳（62）などがある。当該期は各丘陵で多様かつ多くの古墳が造営されるが、最も大規模な古墳群は、越智遺跡が位置する越智谷に展開する与楽古墳群である。与楽カンジョ古墳（3）、与楽鑵子塚古墳（6）、真弓鑵子塚古墳（37）などのように、これらの古墳は持ち送りで天井の高い横穴式石室やミニチュア炊飯具が出土するという特徴があり、東漢氏などの渡来系氏族に関連するものと考えられている。

**飛鳥時代**　切石積石室や横口式石槨を持ついわゆる終末期古墳が、高取町域そして東方の明日香村域で多く造られている。著名な古墳として、精美な切石積みの石槨をもつ岩屋山古墳（36）、束明神古墳（43）、刳り貫き式の横口式石槨をもち切石で敷き詰めた八角形墳であった牽牛子塚古墳（38）などがあり、当該期の天皇・皇子などが被葬者とする見方もされる。一方、与楽古墳群では閃緑岩を用いた初期の横口式石槨をもつ寺崎白壁塚古墳（5）などがある。当該期の集落は明確ではないが、森カシ谷遺跡では木棺墓や石棺墓などの物見櫓と考えられる遺構などが確認されている。

**奈良～平安時代**　当該期の遺跡はあまり多くないが、奈良時代後半から平安時代にかけての遺跡が幾つかみられる。観音寺本馬遺跡では大量の土器と共にミニチュア土器・土馬・人形・獣骨などが河道から出土している。薩摩遺跡では8世紀後半前後に築造された溜池が確認され、出土木簡から波多里長である檜前村主が関与したとされている。また、8～9世紀と考えられる製塩土器が約300点のほか、隆平永寶や承和昌寶、土馬が出土している。薩摩遺跡の南に近接する東中谷遺跡（55）は、9世紀ごろの木棺墓、土坑墓、火葬墓で構成される墳墓群である。観覚寺遺跡では9世紀初頭前後とみられる土器が集中して出土しており、「隅」などと墨書された土器が30点以上、製塩土器・土馬・燃えさしなどもみられた。

**中世**　一町西遺跡では 11 ～ 12 世紀前後の銅鈴・土馬・墨書人面土器・絵馬などの祭祀遺物が河道から大量に出土している。観音寺本馬遺跡では 11 ～ 13 世紀にかけて建物や井戸などが確認され、集落の一角であったことが窺える。標高 140 ～ 150m 前後に位置する松山竹谷遺跡（53）では、13 ～ 14 世紀の集落と墓地が谷をはさんでいるが近接して営まれている。これよりは標高が低い本遺跡周辺でも、与楽ヲギタ遺跡（4）で 13 ～ 14 世紀の建物や耕地、越智城跡で 14 ～ 15 世紀とみられる土塁と区画溝が確認されている。各丘陵では、鳥屋城跡（24）、貝吹山城跡（26）、松山城跡（56）、国見山城跡（70）などの山城が多く分布する。松山城跡では 14 世紀後半～ 15 世紀前半に堀が構築されたことが判明している。

## 第３節　本調査の課題

このような周辺の遺跡分布や調査状況から、調査地では後期～終末期古墳や中世の集落または城館などの遺構が想定された。その一方で 1970 年代以前の地形図（図 36）や空中写真などと見合わせたところ、現在の調査地は削平されている可能性が高いと考えられた。そこで、前章で述べたようにまずはサブトレンチを先行して掘削することにより旧地形や遺構の残存状況を確認することを当面の課題とした。

後述するように調査結果として、調査地の北から東側は削平を受けており、西側から想定されていた中世の遺構・遺物のほか、幅 24m 以上の南北方向の溝または落ち込みが確認され、ここより奈良時代を中心とした古代の遺物が大量に出土した。この成果は、これまでこの越智谷だけでなく、奈良盆地南縁でも調査事例が少なかった奈良時代の遺跡として、今後の調査研究が期待されるものとなった。

《参考引用文献》

朝倉弘 1989「奈良県の名族」『地方別・日本の名族　8　近畿編』新人物往来社
明日香村教育委員会 2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第 10 集
池田末則・横田健一編 1981『奈良県の地名』日本歴史地名大系 30　平凡社
高取町 2020「高取町まち・ひと・しごと・創生総合戦略（改訂版）」高取町ホームページ　http://www.town.takatori.nara.jp/
高取町教育委員会 1976『高取町の古墳』高取町文化財調査報告第 1 冊
高取町教育委員会 2011『薩摩遺跡発掘調査報告書（第 9 次・第 11 次調査）』高取町文化財調査報告第 38 冊
高取町教育委員会 2012『与楽カンジョ古墳・与楽鑪子塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第 39 冊
高取町教育委員会 2014「観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅴ（第 9 次調査）」高取町文化財調査報告第 40 冊
高取町教育委員会 2019『清水谷ナルミ遺跡発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第 44 冊
高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1988
『市尾・新溯古墳群発掘調査報告－付　寺崎西辰巳遺跡発掘調査報告』高取町文化財調査報告第 7 冊
高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1989『越智城－越智小谷地区－』高取町埋蔵文化財調査報告第 9 集
高取町史編纂委員会編 1953『高取町史』高取町教育委員会
奈良県　1985『土地基本調査　吉野山』
奈良県・斉藤美澄編 1914『大和志料』上・下巻　奈良県教育会
奈良県立橿原考古学研究所 1987『高取町与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書第 56 集
奈良県立橿原考古学研究所 2012『一町西遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 110 冊
奈良県立橿原考古学研究所 2013『観音寺本馬遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 113 冊
奈良県立橿原考古学研究所 2013『東中谷遺跡・松山城跡』奈良県文化財調査報告書 158 集
奈良県立橿原考古学研究所 2020『薩摩遺跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 126 冊
奈良県立橿原考古学研究所 2021『松山竹谷遺跡』奈良県文化財調査報告書 188 集
竹内理三編 1990『角川日本地名大辞典　29　奈良県』角川書店
浜口誠至 2015「越智氏」『全国国衆ガイド』星海社
平井洸史・木場幸弘 2023『豪族と渡来人－高取の古墳文化－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
和田萃 2005「飛鳥の陵墓－檜隈坂合陵の再検討－」『古代を考える　終末期古墳と古代国家』吉川弘文館

# 第３章　調査の成果

## 第１節　基本層序

調査地は病院敷地内のグラウンドとなっており、第１章で述べたとおり、東側を１区、西側を２区として設定した（図３）。基本層序は、現代の造成土・耕作土、戦前以前の耕作土、遺構堆積土、地山とした。以下、上層より記述する。

地表直下には、戦後以降と思われる現代の造成土・耕作土（図４・５：１区１層、２区１～３層）が全面的にみられた。厚さ 0.1 ～ 0.8m で、北側に薄く、南に向かって厚くなっている。南側で確認されているコンクリート溝や井戸はこの層前後のものである。２区ではこの下に厚さ 0.4m の黄褐色シルトがみられ、遺物は出土しないが戦前以前の耕作土と思われる。

これらの土層以下には、１区北側サブトレンチ付近から東側及び北側で地山である花崗岩類が母材となった風化土及び再堆積土が確認されている。これより西側においては遺構堆積土が確認でき、１区では SD001、２区では SD002 を検出しているが、地表下より前者は 2.5m、後者は 1.5m 掘り下げた地点で底面が確認できていない。

両遺構は、地表下 1m より下位はグライ化が著しいが、SD002 の下位は滞水している状況であった。なお、SD001 の東肩は地山面より掘り込まれているが、SD002 の東肩では地山面ではなく、その部分の土層（図５：２区７・８層）は SD001 上～中層に色調・質が類似している。つまり、SD001 の西肩が SD002 に切られているか、またはさらに西側に及んでいる可能性が高い。

この２基以外の遺構は、全て SD001 の上～中層の掘削および下層検出時に確認しており、下層よりは新しい。後述するが、そのうち SK006 は出土遺物や土質から SD001 下層と大きな時間差はないと考えられる。一方、それ以外の遺構については土質が下層とは異なり、上～中層に近い。

## 第２節　遺構

遺構は１区西半と２区で確認され、溝または落ち込み２基、土坑３基、井戸１基を検出した（図３）。

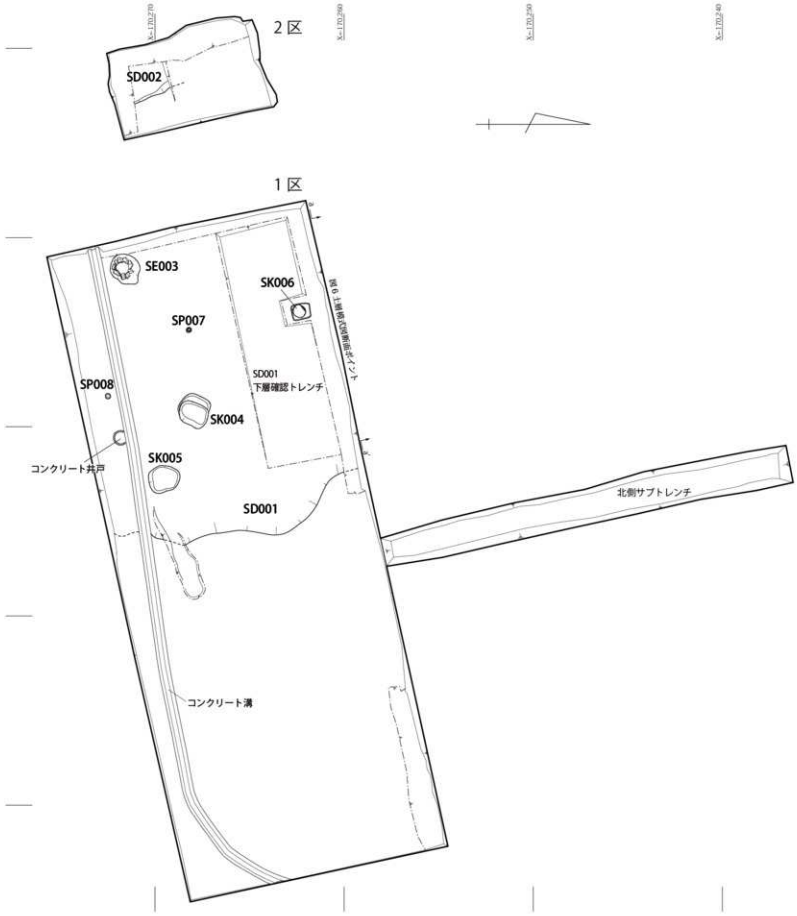
**溝・落ち込み**

**SD001**（図６、図版３～６）

１区西半で検出した南北方向へ延びる落ち込みである。調査区内では東肩のみ確認されており、その規模は南北 14m、東西 17m を測るが、調査区外の南北及び西側にさらに広がる。ちなみに、前節で記述したように、２区の SD002 の肩部まで堆積土が延びていたと考えると、東西は 24m 以上に及ぶことになる。なお深さについては、開発深度の関係により底面まで掘削できておらず、2.3m 以上である。

埋土は大きく３つに分かれ、上層、中層、下層とした（図６）。

上層（図４：２～７層）は、暗灰黄～オリーブ褐色を呈した細砂が主体で比較的土壌化がみられ、層厚は北側が 0.2m 以下と薄く、南側が 1.0m と厚くなっている。南側へ及ぶほどその下位がシルト～粘土化しており、掘削中は滞水していた部分もみられた。古代～中世の遺物が出土するが、中世のものが多い。



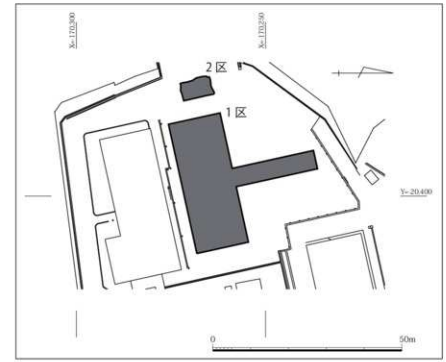
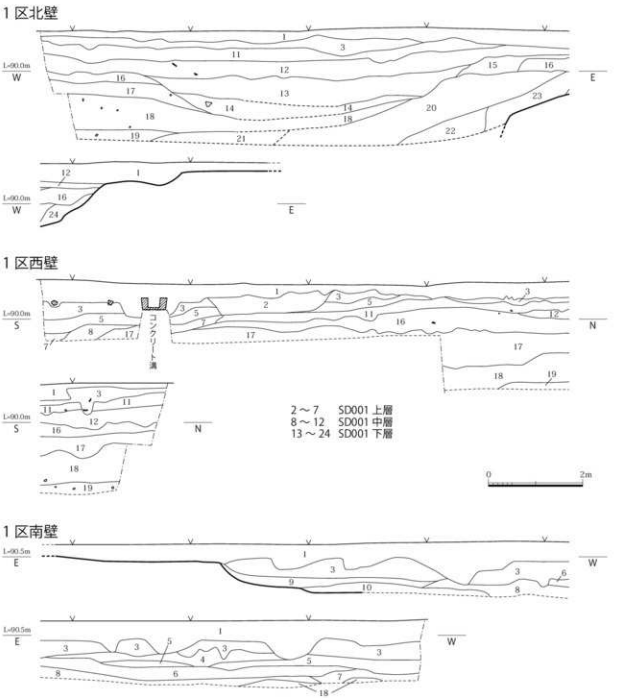




図３　全体平面図（S=1/200）・トレンチ配置図（S=1/1,000）




1. 造成土，耕土（病院造成時及び以前，ビニール・缶・コンクリート含む）
2. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混シルト
（下方に灰 5Y4/1 シルトブロック，中～粗砂ラミナあり）
3. オリーブ褐 2.5Y4/4 細礫混細砂
4. 黒褐 2.5Y3/2 極細砂～シルト
5. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 極細砂
6. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂
7. 灰オリーブ 5Y4/2 粘土～シルト
8. オリーブ褐 2.5Y4/6 粘土～シルト
9. 黄褐 2.5Y5/3 シルト
10. にぶい黄褐 10YR5/4 極細砂～シルト
11. にぶい黄褐 10YR4/3 細～中砂（東側一部グライ化）
12. 褐 10YR4/6 シルト～極細砂，鉄含む（中央側グライ化）
13. 暗オリーブ灰 2.5GY3/1 細砂混粘土～シルト，炭化物含む
14. オリーブ黒 10Y3/2 シルト巨礫混シルト（グライ化）
15. 暗褐 10YR3/3 暗褐粘土混中～粗砂（グライ化）
16. 灰オリーブ 5Y4/2 細砂混シルト（グライ化）
17. 暗オリーブ灰 5GY4/1 細砂混粘土～シルト（グライ化）
18. 暗オリーブ灰 5GY3/1 細礫～巨礫混シルト（グライ化）
19. オリーブ灰 2.5GY5/1 極細砂～シルト（グライ化）
20. オリーブ黒 10Y3/2 細～巨礫・シルトブロック混細砂（ラミナあり）（グライ化）
21. オリーブ灰 10Y4/2 細砂（グライ化）
22. 暗オリーブ灰 5GY3/1 粘土混極細～細砂（グライ化）
23. 緑黒 5G2/1 粘土混中～粗砂（グライ化）
24. 褐 10YR4/4 粗砂

**図４　１区壁面土層断面図（S=1/80）**

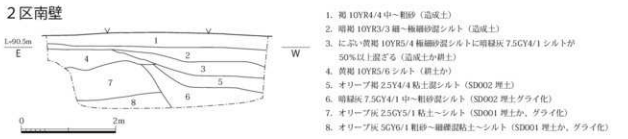



**図 5　2 区壁面土層断面図（S=1/80）**

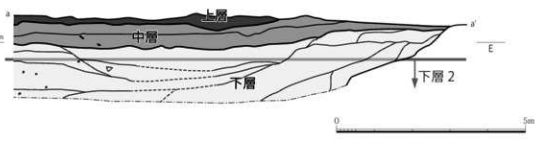



**図 6　SD001 土層模式図（S=1/100）**

中層（図 4：8 ～ 12 層）は、にぶい黄褐色を呈した極細砂～シルトが主体で全体的には土壌化もみられるが、グライ化している範囲もある。層厚は北側で 0.2 ～ 0.6m と南側に向かって厚くなっているが、底面が確認できておらず 0.8m 以上に及ぶ。出土遺物は古代のものが若干多いが、中世のものもみられる。

下層（図 4：13 ～ 24 層）は、オリーブ灰～暗オリーブ灰色を呈した砂礫が混じる粘土～シルトが主体で、全体的に顕著なグライ化がみられる。20 層など部分的にラミナがみられるが、全体に流水や滞水していた状況ではなく、湧水もそれほどみられなかった。他方、ブロック土が顕著にみられる状況でもなかった。南側については掘り下げていないため、南北方向の堆積状況は明確ではないが水平かやや南側に低くなっているものと思われる。東西方向については、全体的に中央部が落ち込むように堆積している。上位にあたる 13・14 層は、幅 7 m、深さ 0.8m 前後で皿状の堆積として一連の埋没過程を示しているが、その下位と土質などに明確な違いは見つけられなかった。出土遺物は、古代のなかでも奈良時代の土器が多く出土し、曲物・柄杓・燃えさしなどの木製品やオニグルミ・モモの種子、ウマ四肢骨などもみられた。土器は摩滅がほとんどみられず、破片が大きく、接合するものも多かった。

本層は標高 89.5m 前後まで人力で掘り下げた後、地山面を確認するために 5 × 10m のトレンチを設定し、重機によって約 1 m の深さとなる標高 88.5m まで掘削を行った。遺物の取り上げは、人力で掘り下げた本層上位の 0.5m ほどの深さで、13・15 ～ 17・20 層を下層、重機で掘り下げた 14 層と 18 層以下を下層 2 と称した。大部分の出土遺物は下層 2 からであるが、下層全体で出土土器の大きな時期差はなかった。なお、底面は確認できておらず、掘削を行っていない標高 88.5m 以下でも遺物は包含されている状況が窺えた。

本遺構は、堆積状況から自然流路ではない溝状遺構として、ひとまず遺構記号 SD001 を付与した。上～中層については、グライ化が一部みられ、全体的には土壌化が進んでいることから、耕作土または整地土と考えられる。下層については、現時点の検出状況から人為的に掘削又は埋め戻したとは言い切れず、奈良時代の遺物が流れこんだとは考えにくい状況で大量に出土していることから、何らかの人為

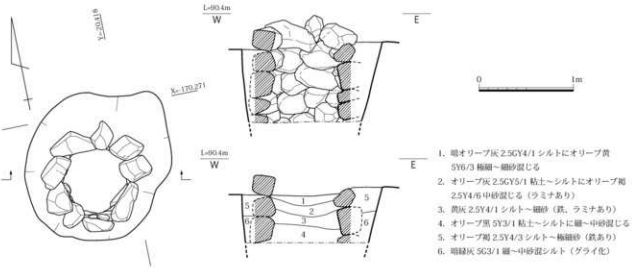



**図７　SE003 平面・立面・土層断面図（S=1/40）**

的な関与があったものと思われる。また、現状では流水や堆積が考えにくい状況であるのに、顕著なグライ化がみられたことも特徴的である。現時点では東西 24m 以上を測り、かなり大規模な遺構であると思われる。しかし、底面が確認できなかった現状では、性格の特定については困難である。そのため、溝と限定することなく、四方に広がる規模をもつことも念頭に入れ、落ち込みと称する。

以上、SD001 は奈良時代に形成された何らかの人為的な関与が考えられる大規模な落ち込みで、中世には埋没したものと思われる。

**SD002**（図 5、図版 7）

２区西半で検出した南北方向へ延びる溝である。調査区内では東肩部のみが検出されたが、掘削中に水が湧いてくる状況のため、遺構の検出は南端のみに留まり、現状の規模は東西と南北共に３m であった。しかし、西壁の堆積状況を考慮にいれると、調査区内全体に東肩部が続き南北 8m を測り調査区外の南北及び西側にさらに広がる。なお深さについても、湧水のため底面まで掘削できておらず、2.3m 以上を測る。埋土はオリーブ灰～暗緑灰色砂礫混じりシルトで、SD001 よりもグライ化が強くみられ、滞水があったものと思われる。出土遺物は土師器、瓦器椀、中～近世陶磁器がみられた。前述のように、掘り込み面の土層は SD001 の埋土の可能性がある。

本遺構は、小面積の調査のため規模や形状が不明であるが、滞水がみられることから溝と称する。時期的には SD001 より新しいと考えられるが、出土遺物も少ないので、中～近世と幅広く捉えたい。

### 井戸

**SE003**（図 7、図版 8・9）

１区の南西端で検出した石組井戸である。SD001 上層の掘削時に確認されており、おそらく同時期またはそれ以前に埋まったものと考えられる。径 1.2 ～ 1.4m のやや不正な円形の掘方に石組を内径 0.6 ～ 0.7m の円形に組んでいる。深さは 1.5m、石組は８段以上続くが、標高 88.7m の時点で水が湧く状況が認められた。これ以上の掘削は、安全面と開発深度を考慮して中断したため、底面は確認できなかった。石組は人頭大の礫を１段に 10 個程度を１列に配して概ね垂直に積み上げている。埋土は確認できた深さ 0.5m まではほぼ水平で、下位に行くほど粘土化している。

掘方及び石組内の埋土から、古代の土師器のほか、12 ～ 13 世紀の瓦器椀、土師器が出土している。

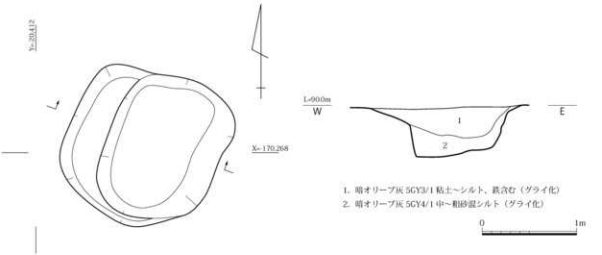



**図 8　SK004 平面・土層断面図（S=1/40）**

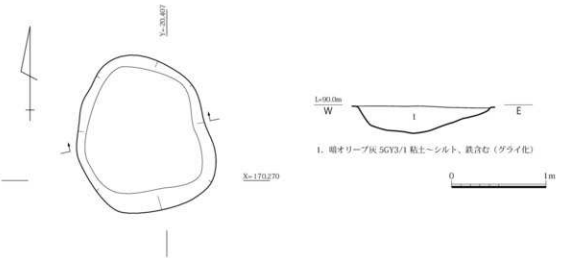



**図 9　SK005 平面・土層断面図（S=1/40）**

**土坑**

**SK004**（図 8、図版 10）

1 区西側中央で検出した土坑である。SD001 の下層上面で確認されている。平面が一辺 1.6m の略方形を呈し、掘方は西側に段がつき、深さは 0.5m である。埋土は暗オリーブ灰色シルトでグライ化がみられる。中世の土師器、瓦器椀が出土している。

**SK005**（図 9、図版 11）

1 区西側中央の SK004 より東側で検出した土坑である。SD001 の下層上面で確認されている。平面が 1 辺 1.4 ～ 1.6m の略方形を呈し、断面は皿状、深さは 0.3m である。埋土は暗オリーブ灰色シルトでグライ化がみられ、SK004 と類似する。遺物は出土していない。

SK004・005 は埋土が類似していることから、概ね中世の時期が想定される。

**SK006**（図 10、巻頭図版 1、図版 11 ～ 13）

1 区の北西側で検出した曲物が据えられた土坑である。SD001 下層上面より掘り込まれており、0.8m × 1.0m の方形の土坑に、径 65cm、高さ 30cm の曲物が据えられていた。検出面は SD001 中層で覆

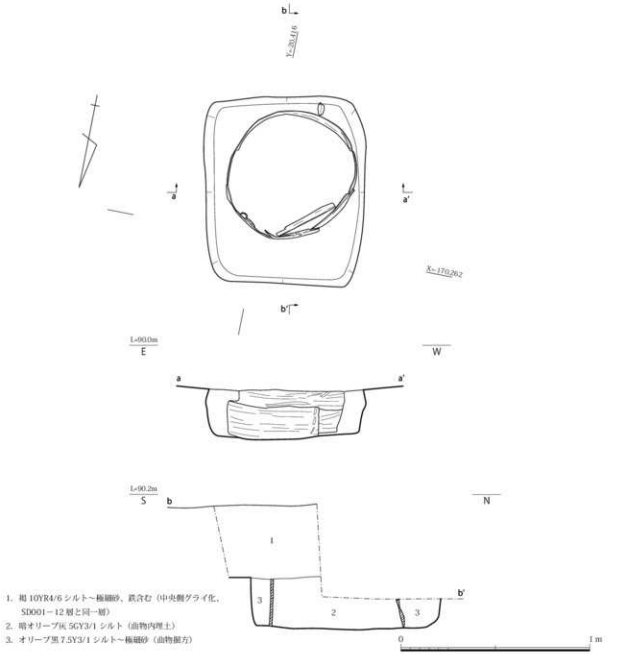



**図 10　SK006 平面・土層断面図（S=1/20）**

われていた。曲物内と掘方の埋土には大きな違いはなく、砂礫が比較的混じる SD001 下層とは少し異なるが、色調には大きな違いはない。曲物は上半と底板が欠損しており、また後節で説明するように結合部の組が外れた状態で出土した。掘方及び曲物内の埋土より奈良時代の土器が出土しており、SD001 下層と大きな時期差はみられない。

本遺構は、曲物を数段積み上げた井戸の一部であった可能性は考えうる。しかし、埋土及び掘り込み面である SD001 下層はグライ化しているとはいえ、底面のレベルは標高 89.5 m だが現状では水は湧いておらず、常時滞水するような状況とは考えにくい。いわゆる溜井などの可能性はあるが、現時点では性格が特定できないため、土坑と称する。

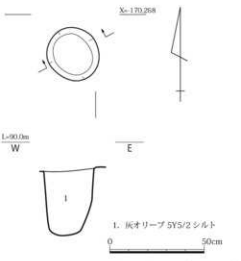



図 11　SP007 平面・土層断面図（S=1/20）

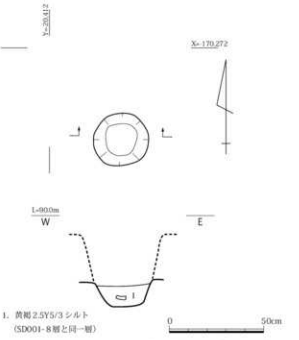



図 12　SP008 平面・土層断面図（S=1/20）

**ピット**

**SP007**（図 11）

1 区西側中央の SE003 と SK004 の間で検出したピットである。SD001 の下層上面で確認されている。径、深さ共に 0.3m、底面のレベルは標高 89.7m。埋土は灰オリーブ色シルトで、SD001 上層と類似している。遺物は出土していない。

**SP008**（図 12、図版 13）

1 区西側中央南壁付近で検出したピットである。SD001 の下層上面で確認されている。径 0.3m、深さ 0.1m、底面のレベルは標高 89.5m。埋土は黄褐色シルトで、SD001 上層（図 4：8 層）と同一であるため、本来の検出面は 0.2m 前後高かったものと思われる。土師器皿、黒色土器 A 類椀、瓦器などが出土している。

ピットは 2 基の検出に留まり、現状ではその性格を特定することは難しい。埋土からは SD001 上層と同一または類似するものなので、概ね中世の時期が想定されよう。

## 第 3 節　遺物

遺物は土器、木製品、石製品、金属製品がみられ、時期的に大半が古代で一部は中世のものがある。

**溝・落ち込み**

**SD001 出土遺物**

前節でも述べたように、大きく上層・中層・下層の 3 つに分かれる。下層 2 は、下層の中で確認トレンチを設定して下方を掘り下げて取り上げたもので、下層の中で相対的により下位から出土したものとみられる。また西壁側溝は層位を区分せずに取り上げたものと、上中層・中下層としたものは接合したものと区分せずにまとめて取り上げたものである。また土器については、各層で古代・中世と時期差がある場合はそれぞれに分けて説明している。

西壁側溝（1～4）

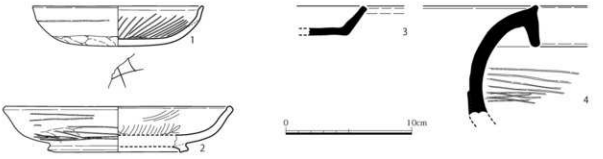



**図 13　SD001 出土遺物実測図（1）（S=1/3）**

**【西壁側溝】**（図 13、図版 14）

**土師器杯（1）**　杯Ｃ。外面はケズリとミガキを全く施さない a0 手法で、口縁はヨコナデ、体部下半から底部はユビオサエを残す。内面は一段斜放射暗文（以下、一段暗文）で、その間隔は上端で５～7mm である。外底に複数の直線による線刻がある。

**土師器皿（2）**　皿Ｂ。内外面とも器面の崩落・摩滅が目立つ。外面はケズリが底部、ミガキが口縁のみ施す b1 手法、横方向のミガキが上方では 5mm とまばらだが、下方ではほぼ接しておりやや密である。内面は二段斜放射暗文（以下、二段暗文）である。

**須恵器皿（3）**　皿Ｃ。口縁は丁寧なヨコナデを施し、端部は外傾する平坦な面をもち色調は灰白色、胎土は砂粒がほとんど混じらない。

**須恵器甕（4）**　口が大きく開く甕で、口縁端部が大きく垂下する面をもつ。内面に長石・石英等に由来する白色の斑点が顕著である。

**【上層】**（図 14・15、図版 14）

**土器・古代（5～8）**

**土師器椀（5）**　椀Ａ。外面は全面ケズリでミガキを全く施さない c0 手法で、口縁端部から体部内面にかけて丁寧なヨコナデを施し、器壁を３～ 4mm と薄く仕上げる。

**須恵器壺（6）**　ハ字状の高台をもつ壺。内面底部にはユビオサエが残る。

**灰釉陶器壺（7）**　三角状の高台をもつ壺で、外面に薄い透明の自然釉が掛かる。

**緑釉陶器椀（8）**　削り出しによる短く細い輪高台をもつ椀。釉は灰緑色で薄く透明感があるもので、外底には掛からない。胎土は砂礫が混じらず精良で、軟質である。

**土器・中世（9～20）**

**土師器皿（9～12）**　9はいわゆる「て」字状口縁の皿で、雲母が目立つ。10～ 12 は口縁を強くナデを施し短く外反させて平坦な底部をもつ一群。口径は 10・11 が 8cm 台、12 が 11cm 台。

**土師器釜（13）**　口縁を「く」字状に外反させ端部を上方にわずかに肥厚する釜の口縁で、大和Ｂ型と思われる。砂礫が大量に混じり器壁が厚い。

**瓦器椀（14～17）**　大和型。外面のヘラミガキや口縁・高台の形状から、14 はⅡ段階、15～ 17 はⅢＡ段階に収まるものと思われる。

**瓦器皿（18）**　口縁が短く直線的に伸びる平底のもの。内面のミガキは体部へ横方向に比較的密で、見込みは全容は不明だが２本単位で直線を描く。

**輸入白磁椀（19）**　中国製白磁の椀Ⅳ類。

上層（5～21）

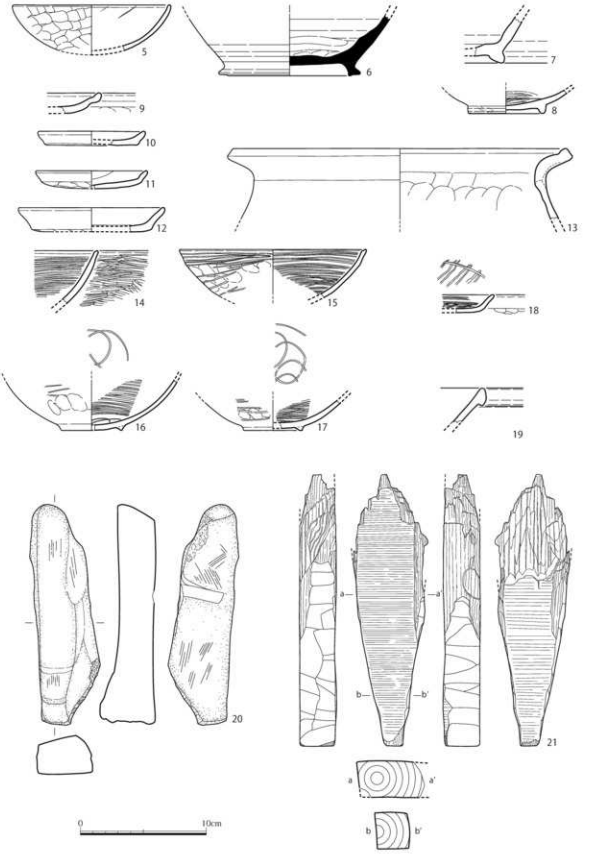



図 14　SD001 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

**石製品（20）**　砥石。図面掲載を行った 2 面に線状痕と摩滅痕があり、左面がより滑らかである。雲母片が目立つことから、第 4 章第 3 節で述べる分析 No.1 と同様な結晶片岩と思われる。

**木製品（21・22）**　21 は心持材を利用して表裏面を平滑に加工された厚さ 3cm の板で、残存している一端は粗めのケズリで下端を幅 1cm と短い逆台形状を呈した不明製品である。22 はタケの節を一端は水平に、もう一端は上端から斜めに切断した杭状の不明製品である。節は縦方向に欠損しているが、2 か所ある節内側は現状で欠けているが、穿孔などの加工によるかは不明である。種はマダケと思われる。

**【上・中層】**（図 15、図版 15・16）

**土器・古代（23・24）**

**土師器杯（23）**　杯 A。外面は底部のみケズリを施す b0 手法で、口縁は強いヨコナデにより外反し、端部は上方に摘み上げる。内面は一段暗文で、その間隔は上端で 5 ～ 7mm である。外底には十字状に 2 条の線刻がされる。

**緑釉陶器椀（24）**　わずかに外反する口縁で、釉はやわらかい黄緑色で薄く透明感がある。

**土器・中世（25 ～ 27）**

**土師器皿（25）**　口縁を強くナデを施して外反させたやや深めの器形である。

**瓦質土器鉢（26）**　口縁端部に外傾する面取りがみられる。内外面ともに幅 1mm の暗文が密に施される。

**瓦質土器釜（27）**　直立し比較的短めの口縁で、幅が狭い鍔がある釜で、山城 E 型と思われる。外面は煤が付着している。上層と中層で接合した。

**石製品（28）**　川原石と思われるもので器面は滑らかである。図面掲載を行った 2 面にわずかな凹みと線状痕がみられ、煤が付着している。用途などは不明。

**木製品（29・30）**　29 は外面に樹皮がわずかに残る心持材を利用し、断面が長楕円形、一端を水平に加工し、もう一端は円柱状に粗く削り上げた不明製品である。一見、独楽と類似した器形をもつが、断面が正円にはやや遠い楕円形であること、端部が欠損している先端の整形がかなり粗い。ただ、現状で長さ 6cm、最大幅 5cm 前後の大きさは類例の範疇であり、独楽の未製品の可能性も考えられる。30 は心持材を利用し、両端はほぼ切断した面が残った状態で、外面を間隔がまばらであるが大略八角形に面取りした不明製品である。長さ 4.0cm、径 3.5 ～ 4.0cm で面取りされているものにはやはり独楽があるが、先端の整形はみられない。

**【中層】**（図 15）

**土師器皿（31）**　緩やかに内湾する器形で外面体部中位までヨコナデを施し、雲母の混入が目立つ。

**瓦器椀（32）**　大和型。全体的に摩滅が激しく、調整や暗文が窺えない。高台が比較的厚めで径 5cm 台であるので、Ⅱ段階のものと思われる。

**【中・下層】**（図 16、図版 16）

**土器・古代（33 ～ 36）**

**土師器高杯（33）**　高杯 A。平たく浅い杯部の口縁、外面はヨコナデとミガキ、内面はおそらく二段暗文が施される。

**土師器杯（34）**　杯 A。外面全体にケズリ、ミガキを施す c3 手法で、口縁にかけて器壁が薄くなり、端部はわずかに丸く肥厚する。胎土は砂礫が少なく精良である。

**須恵器提瓶（35）**　提瓶の肩部。突起部は径 0.8 ～ 1.0cm、厚さ 1mm と形骸化が激しい。外面には白色の自然釉が掛かる。

**須恵器甕（36）**　短く外反する口縁で、端部は玉縁状である。外面には縦方向のカンナケズリが残る。

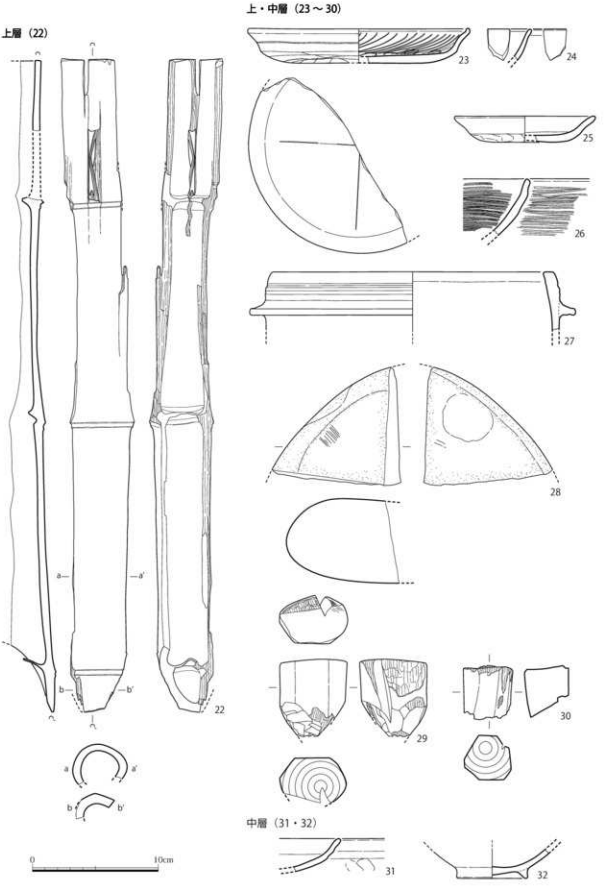



図15　SD001 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

中・下層（33 ～ 38）

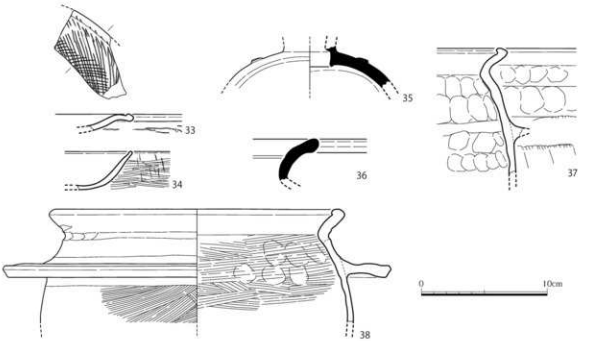



**図 16　SD001 出土遺物実測図（4）（S=1/3）**

**土器・中世（37・38）**

**土師器釜（37・38）**　口縁形態から大和 B 型で、砂礫を多く含む。37 は鍔が小さくやや下位に位置することから B2 型、38 は鍔が大きく肩部上位に位置することから B1 型と思われる。38 は外面体部に煤が付着している。

**【下層】**（図 17・18、図版 16・17）

**土師器杯（39・40）**　杯 A。外面が b0 手法、口縁上方が緩やかに外反し端部を丸く肥厚させる。39 は口径 15cm 台、内面の暗文はない。40 は口径 17cm 台、内面は一段暗文で、見込みは螺旋暗文である。体部側の割れ面 2 辺に漆継ぎ痕がみられる。

**土師器皿（41 ～ 43）**　皿 A。外面が b0 手法、口縁は内湾し端部をわずかに丸く肥厚させ、口径は 20cm 前後である。内面も一段暗文であるが、その間隔が 42 は 5mm とやや広めで、41・43 は 3mm である。43 は内外面の一部に煤が付着し、外底には 2 条の線刻がみられる。

**土師器椀（44）**　椀 C。外面が e0 手法、口縁は幅狭くヨコナデを施し、端部はわずかに上方へ摘み上げる。器壁が 2 ～ 3mm と薄い。

**土師器鉢（45）**　全体的に内湾する大形の鉢。口縁はヨコナデにより体部との境に稜がみられる。胎土には小さな雲母が目立ち、器面の崩落が激しい。

**土師器甕（46 ～ 48）**　胴部が球形を呈するもの。口縁をヨコナデにより大きく外反させ、端部を上方に摘み上げてている点は共通するが、46 は口縁と胴部の境が段状の稜線となっている点が特徴である。46 は口縁外面、47 は口縁内外面に煤が付着する。

**須恵器杯（49 ～ 51）**　49 は杯 B。口縁は直線的に伸び、高台は短く、体部と底部の境に貼り付けられる。胎土は灰白色で砂礫も少ない。50 は杯 L。口縁端部を緩く外反させた内湾する器形で、比較的高めの高台をハ字状に貼り付ける。見込みは不定方向のナデが顕著である。51 は杯 B 蓋。笠形を呈する。

下層（39～55）

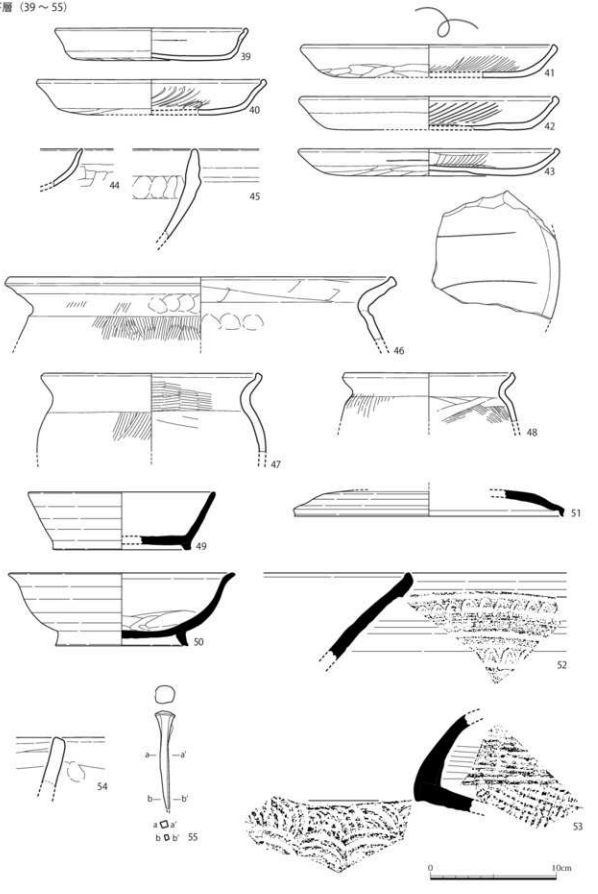



図 17　SD001 出土遺物実測図（5）（S=1/3）

下層（56 ～ 61）

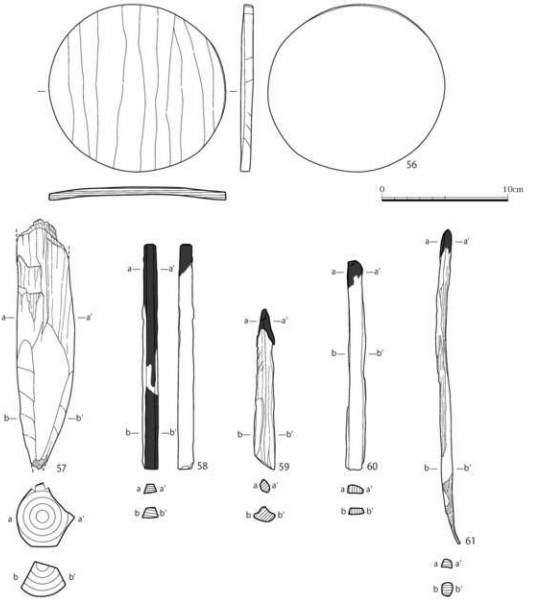



**図 18　SD001 出土遺物実測図（6）（S=1/3）**

**須恵器甕（52・53）**　52 は幅広の玉縁状を呈した口縁。頸部外面には工具幅 2 ～ 3mm の波状文 1 条が、凹線を挟んで 2 段みられるが、破片のため全容は不明である。53 は頸部片。胴部の外面が格子状、内面が同心円状のタタキ目が残る。胴部外面には白色の自然釉が掛かる。また、口縁内外面には 4 と同様な白色の斑点がみられるので、同一個体の可能性がある。

**製塩土器（54）**　器厚が 1cm 前後と厚手の直線的な口縁。内面は丁寧なナデにより器面は平滑で、口縁端部は比較的水平な面をもつ。胎土は灰白色で 5mm 以下の砂礫が混じり、縦方向に層状となっている。

**鉄製品（55）**　鉄釘。頭部は四方に叩き延ばして笠状を呈し、平面形が方形である。

**木製品（56 ～ 61）**　56 は板目材を利用した厚さ 0.5 ～ 0.7cm、径 13cm 台の小形の曲物の底板である。57 は径 4.5cm の心持材を利用し、先端から 3 ～ 11cm の範囲をやや粗目で錐状に尖らせた杭である。58 ～ 61 は燃えさし。先端部の一端もしくは両端が炭化し、両端部に切断痕が窺える棒状木製品である。58 は長辺 4 面が整形されて断面が台形を呈した板状製品を転用したものと思われ、木口両端とも水平

下層 2（62 ～ 80）

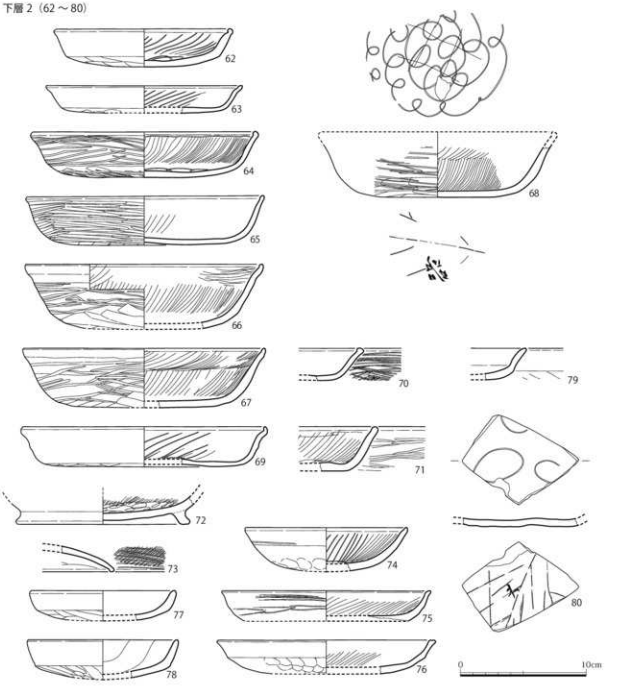



**図 19　SD001 出土遺物実測図（7）（S=1/3）**

な切断痕がみられる。表裏面の片面が全体的に黒変しているが、強く炭化しているのは上端のみである。59 は断面が不整形で、下端は斜めに切断されている。炭化は上端のみ。60 は全体が蛇行状に歪んでいるが断面は長方形で下端側面に面取りされた痕がみられ、下端は若干不整であるが水平に切断される。炭化は上端のみ。61 は断面が不整な円形で、下端は針状に細くなっている。炭化は上端のみ。本層における燃えさしは、図化していないものを含めて計 5 点出土している。

**【下層 2】**（図 19 ～ 25、図版 17 ～ 27）

**土師器杯（62 ～ 80）**　62 ～ 71 は杯 A。口径では 13cm 台（62）、15cm 台（63）、18 ～ 19cm 台（64

～ 69）がある。器高では 3cm 前後の浅め（62 ～ 65・69 ～ 71）、4cm 前後の深め（66 ～ 68）に分けられる。外面はケズリを底部のみ、ミガキを口縁のみを施す b1 手法が 64 ～ 68・70・71、ミガキを施さない b0 手法が 62・63・69 である。内面体部は、二段暗文（66 ～ 68）、上部に連弧文を配する一段暗文（64）、一段暗文（62・63・65・69・71）、暗文を施さないもの（70）がある。その暗文の間隔は、64・66・68 は 1 ～ 2mm と狭い。見込みは、65 ～ 67・70 を除き、螺旋暗文を施す。66 ～ 68 は深めの器形で二段暗文をもち、外面のやや雑なミガキなど共通性が高い。一方で、66 の上段の暗文は連続ではなく間隔を空けて配し、外底全体にジクザク状にミガキを施すなど、個性もみられる。また、68 は外底に木の葉状痕が残り、「器」の墨書があり、さらに見込みに井の字状の線刻がみられる。62 は口縁端部を丸めて、内面に暗文を有するなど杯Ａの範疇とみたが、口縁を強くナデを施し、底部のケズリは粗く、丸みがある底部との境に稜をなすことは杯Ｈの特徴も合わせもつ。72 は杯Ｂ。内面体部には間隔が密な放射暗文を施されるが、やや丸みを帯びた底部からは深めの器形が想定されるため、二段暗文の可能性がある。見込みは螺旋暗文を施す。73 は杯Ｂ蓋。笠状を呈し、口縁端部をやや肥厚し丸く摘み上げる。外面は密な間隔で格子状にミガキを施し、内面は強いヨコナデを施す。内外面は部分的に黒変がみられ、煤と判断できるものは内面にわずかにみられる。74 ～ 76 は杯Ｃ。内面は一段暗文で、その間隔は上端で 5mm 前後である。外面は顕著なケズリが窺えない一方で口縁に強いヨコナデが施され、74･75 は口縁のみミガキを施す a1 手法、76 はヨコナデの幅が狭く e0 手法というべきか。口径は、74 は 12cm 台、75・76 は 16 ～ 17cm 台である。75 は口縁と見込みの一部が黒変している。77・78 は杯Ｈ。口縁は強くヨコナデ、底部は粗めなケズリを施す b0 手法だが、体部境の稜が目立ち、内湾する器形をもつ。口径は 12cm、器高は 3cm 前後で、比較的小ぶりな印象がある。79 は、強いヨコナデにより口縁を大きく外反する杯である。底部はケズリの可能性もあり、杯Ｈに類似する印象がある。80 は杯底部片で、外面に木の葉状痕と「木」の墨書、見込みには螺旋暗文がみられる。

**土師器皿（81 ～ 88）**　81 ～ 86 は皿Ａ。口縁端部は肥厚させるが、81・82 が内傾する面、83 は上方に摘み上げ、84･85 は丸く収めており、バラエティがある。口径は、81 が 17cm 台、82･83 は 21cm 台、おそらく 84・85 も後者に近いものと思われる。外面は丁寧にヨコナデされるがミガキはなく、83 のみケズリを底部に施す b0 手法、他は底部にユビオサエを残す a0 手法である。内面は一段暗文で、その間隔は 82 が 1cm 前後で、他は 5 ～ 7mm 前後である。見込みは、81 と小片である 89 以外は、螺旋暗文である。81・86 は外底に木の葉状痕を残す。外底の線刻は 83・84 にみられ、複数の直線を十字に交わらせている。墨書は 81 の外底にみられ「越」と記される。84 は内面に黒漆が破片全面に塗布され、口縁外面は煤付着の可能性もある。85 は割れ面に煤が付着し、86 は見込みが黒変している。87 は皿Ｂ。口縁を強いヨコナデにより外反させ端部を摘み上げ、内面は一段暗文、見込みに螺旋暗文を施す。底部にケズリを残す可能性もある。内面は一部黒変がみられる。88 は皿Ｈ。口縁は強くヨコナデ、底部のケズリは粗く幅広とする b0 手法である。内面は一部黒変がみられる。

**土師器杯・皿（89）**　杯か皿か判別ができない底部片で、外面に「木カ」の墨書がある。

**土師器椀（90 ～ 94）**　椀Ｃ。口径は 12 ～ 13cm 前後であるが、器高は 4.0cm 前後（92・93）、3.5cm 前後（90・91・94）と器形の深浅がみられる。外面は口縁を幅狭くヨコナデする e0 手法だが、92・93 は体部から底部にかけて凹凸がやや目立つ。体部下半から底部には 90・93 のように斜めまたは一定方向の板ナデ痕がみられるものもあり、全体的に見込みはやや凹凸がある。口縁端部は、90 は内傾する面をもち、91 ～ 93 はわずかに外反し、94 はほぼ直立する。煤の付着は、90 が口縁端部、93 は内面の一部にみられ、かつ全体に黒変している。

下層 2（81～98）

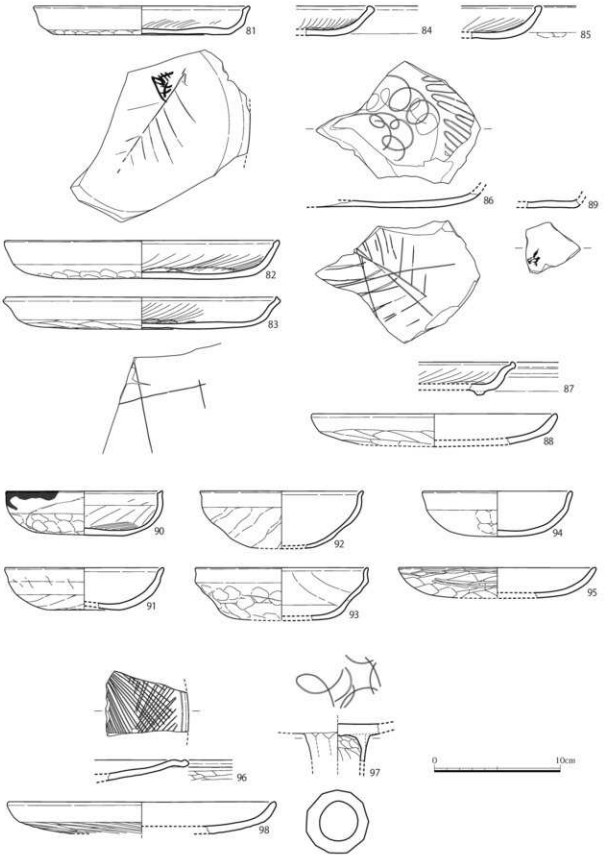



図 20　SD001 出土遺物実測図（8）（S=1/3）

**土師器椀・杯（95）**　外面は全面にケズリとミガキを施す c3 手法で器面が滑らかであり、椀Dの可能性もある。全容が不明の破片で、また浅めの器形であり、杯形ともみられるので椀か杯としておく。口縁端部を中心にほぼ全面が黒変している。

**土師器高杯（96 ～ 98）**　96 は内面に二段暗文を施すラッパ状の口縁、97 は多面体に面取りされた脚部で、高杯Aである。98 は内湾する浅めの器形で、口縁はヨコナデで前述した皿Hの調整に類するが、体部下半のケズリは細長く施される点でやや異なる。平坦な器形から高杯の杯部の可能性がある。

**土師器鉢（99 ～ 101）**　99 は全体が内湾する器形をもち、外面全体をケズリとミガキを施す c3 手法で、口縁端部はわずかに丸く肥厚する。100 も同様な器形であるが、外面はミガキがない b0 手法で、口縁が強いヨコナデにより内側に屈曲しており、内面体部にはおそらく間隔が広い螺旋暗文を施す。101 は広い平坦な底部から体部が直線的に開く杯Aを大型にしたような鉢で、体部上半をヨコナデとまばらなミガキを施す a1 手法をとり、内面は丁寧なヨコナデにより同心円状にナデ痕を残す。見込みに複数の直線が線刻される。

**土師器蓋（102）**　上面が平坦な摘みをもつ蓋で、直線的な体部と器壁が 7mm と厚いことから、杯ではなく壺Aなどの蓋の可能性がある。

**土師器小型壺（103）**　口縁を丁寧なヨコナデにより外反させ、丸底を呈する。

**土師器甕（104 ～ 108）**　104 ～ 107 は口縁をヨコナデにより大きく外反させ、端部は上方に摘み上げて、球形の胴部をもつ。図化していないものもこのタイプが多い。胴部は外面ハケメ、内面は板ナデにより比較的なめらかである。ハケメは 104 が 10 本 /cm 前後で細かく、他は 5 本 /cm と粗めである。口径では 104・105 が 18 ～ 19cm 台、106 は 30cm 近いもので、107 も後者の可能性がある。使用状況では、104 は外面が黒変し口縁内面に煤付着、105 は外面頸部に煤付着で内面は黒変、106・107 は内面胴部に煤付着がみられる。108 は直立気味の口縁をもつ。全体的にハケメ（9 本 /cm）を施した後、口縁外面はヨコナデで消され、端部は外傾する。

**土師器鍋（109）**　口縁はヨコナデ、端部をわずかに上方へ摘み上げるもので、体部外面はハケメ（9 本 /cm）を施す。

**土師器甕・鍋（110・111）**　甕または鍋の把手。110 は幅 10cm、高さ 5cm 前後の大振りなもので、全体的に黒変する。111 は幅・高さ 3cm 前後の小振りなもので、外面は縦方向のナデを施す。

**黒色土器甕（112）**　断面も含めて全体に黒色を呈する。口縁をヨコナデにより短く外反させて、端部はやや細めに丸める。口縁外面に煤付着。

**須恵器杯・蓋（113 ～ 127）**　113 ～ 115 は杯A。口縁がまっすぐ伸びるものだが、115 は端部が若干外反する。口径は 113・114 が 13cm 台、115 は 16cm 台。113 は器壁の厚さが 5 ～ 7mm とやや厚手であるため、器形が浅く感じる。胎土は通例のものであるが、115 は白色の斑点が目立ち、4・53 に類する。113・114 は口縁内外面の一部が黒変し、煤の付着もみられる。116 ～ 121 は杯B。116 ～ 118 は口径 15cm 台、器高 4 ～ 5cm 台と概ね類似した法量をもち底部も平坦であるが、116 は口縁の開きがやや大きい。高台は端部が外側にやや突っ張る点は共通するが、116・120 は他より幅・高さ共に 3mm 前後小振りである。色調は通例であるが、116 は内面と外底がやや白っぽい。117・118 は内面の一部がやや黒変している。119 は口径 20cm 台の大形で底部がゆるやかに凹み、口縁端部が内傾する面となる。胎土はやや軟質で黒色粒がみられる。外底の中央から少し外れた位置に「越」の墨書がみられる。121 は高台際の底部片で、外底に「伴ヵ」または「継ヵ」と思われる墨書がある。122 ～ 126 は杯B蓋。122 ～ 124・126 は笠形で、つまみが 122・124 は通例の宝珠形だが、123 は台

下層 2（99～112）

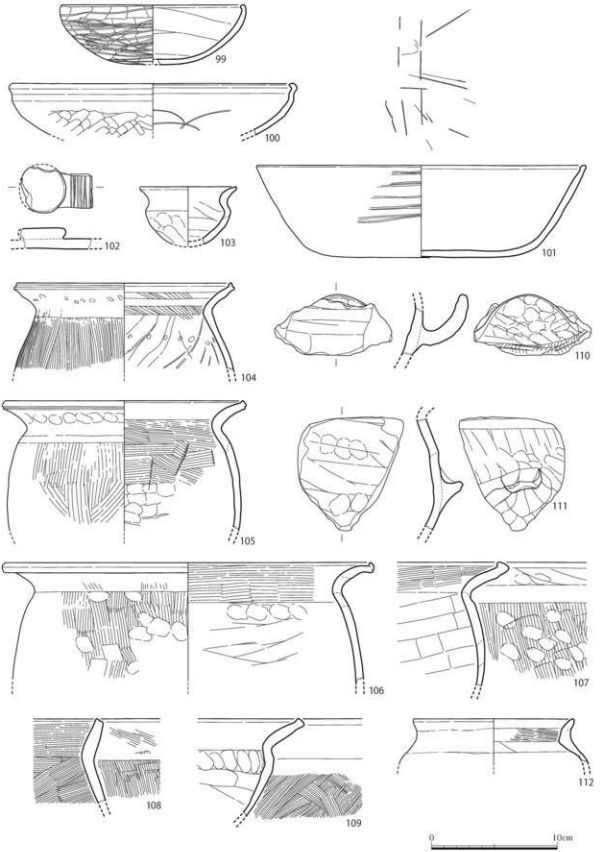



図 21　SD001 出土遺物実測図（9）（S=1/3）

下層２（113～129）

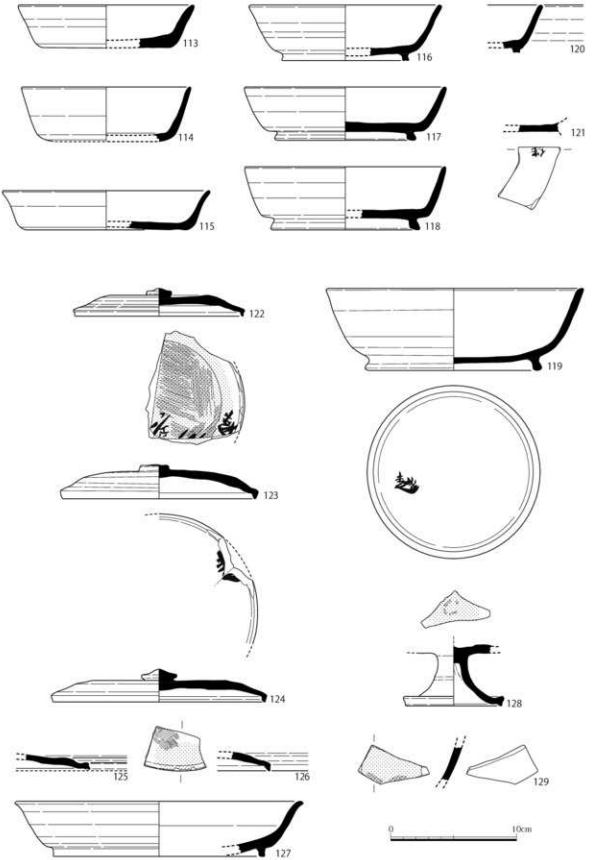



図 22　SD001 出土遺物実測図（10）（S=1/3）

下層 2（130～137）

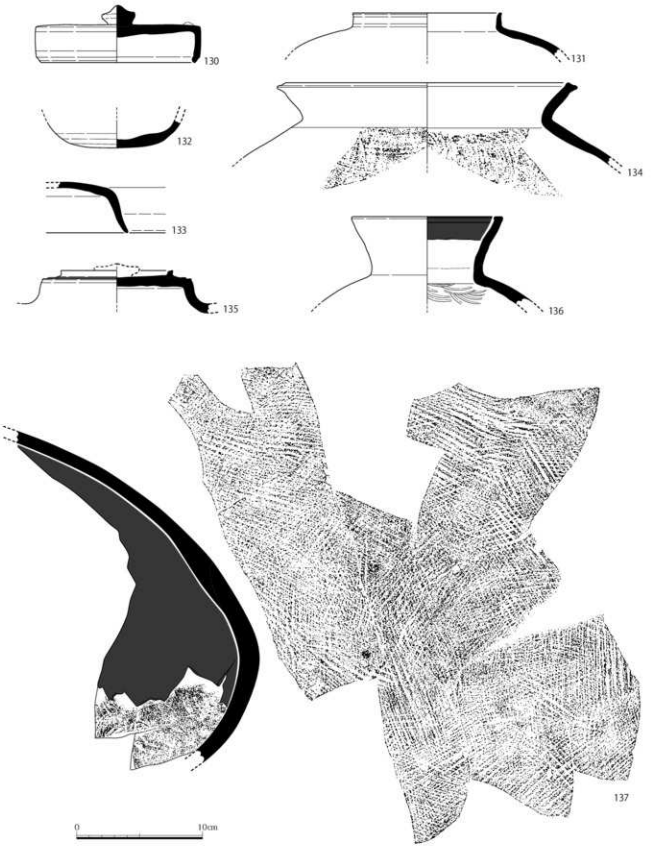



図 23　SD001 出土遺物実測図（11）（S=1/3）

形状となっている。122 や 126 のように内面中央を縦横にナデ痕が強く残るものがある。色調は 122 ～ 124 がやや白っぽい。122 は内面口縁寄りに「越」の墨書、周辺には線状や点状に墨が当たった痕、また内面全体に摩滅と墨の付着がみられ、転用硯と思われる。123 は内面口縁寄りに「越ヵ」の墨書。124 は内面全体が黒変している。125 は頂部が扁平で口縁端部が屈曲したもの。126 は内面に摩滅と墨の付着がみられ転用硯と思われる。杯 B 蓋の器形は掲載外の資料でも、笠形が大半である。127 は杯 L。口縁の中位から外反し、底部が凹み、口径 22cm 台に対し器高 4.5cm と浅めの器形である。高台の端部がややいびつで幅 1 ～ 3mm で、杯 B よりは細い。胎土には砂礫が少なく、焼成はやや不良で白っぽい。

**須恵器高杯（128）**　脚部。底径 7.5cm、脚高が 4cm で、小振りのものと思われる。杯部には墨が付着しており、転用硯と思われる。

**須恵器鉢（129）**　胴部片。内面が摩滅し墨が付着しており、転用硯と思われる。

**須恵器壺・蓋（130 ～ 133）**　130 は壺 A 蓋で、平坦な上面に腰高の宝珠形のつまみをもち、口縁は垂下する。131 は身の上半で、短い口縁端部が直立する。緑灰色の自然釉が蓋上面と身頸部に掛かり、口径では蓋 12.2cm、身が 11.7cm であることから、セット関係で生産された可能性が考えられる。132 は丸みのある底部。外面はやや粗いヨコナデ。内外面の一部が黒変。全体の器形は不明。133 は壺蓋で、上面は緩やかに盛り上がり、口縁は斜め下方にやや開き、端部はやや細く丸める。上面が灰被りのためかやや白い。

**須恵器甕（134）**　口縁が外反するもので、端部は外側に肥厚させる。口縁をヨコナデ、胴部は外面が格子状タタキ目で、内面は同心円状タタキ目をナデ消ししている。

**須恵器蓋（135）**　平坦な上部から下方に大きく外反する蓋。上面には輪状の細い突帯をもち、中央につまみを貼り付けた痕がみられる。外面には自然釉が掛かり、上面は摩滅のためか滑らかである。類似する器形は陶邑窯Ⅳ型式 1 段階にみられ、泉佐野市諸目遺跡では完形品が出土している（大阪府文化財センター・泉佐野市教育委員会 2013『諸目遺跡』）。

**須恵器横瓶（136・137）**　136 は、やや斜め上方に開く口縁で、端部は水平な面をもちわずかに内側に肥厚するもので、胴部が横長に伸びることが想定されたため、横瓶と考えた。外面には淡緑色の自然釉が掛かり、口縁内側上半には黄灰色の付着物がある。137 は横長の胴部であるので横瓶とした。外面は平行タタキ目、内面は同心円状タタキ目が残る。また内面には白色でピンク色の斑点がみられる付着物がある。

**製塩土器（138 ～ 147）**　138 ～ 142 は器厚が 6 ～ 7mm の厚手の直線的な口縁で、筒形の体部をもつものと思われる。口縁端部はやや不整で水平または外傾する面をもつが、142 は先が尖っている。内面は波板状に凹凸が目立つものが多く、横または斜め方向のナデによるものと思われる。外面はユビオサエが残るが、138 や 140 のように螺旋状にみられるものもある。これらの特徴は、回転ナデを利用した成形とされる。胎土は灰黄～灰白色、5mm 以下の砂礫が混じるものが大半で、141 や 142 のように微細な雲母がみられるものもある。143 はやや外側に開く口縁で、胎土は橙～褐灰色で 5mm 以下の砂礫が混じり、クサリ礫が目立つ。144 は器厚が 3 ～ 5mm とやや薄手で、胎土は灰白色、砂礫は 1mm 以下で少ない。145 は胴部片で、その周囲の曲線からは他の破片より口径が大きい印象を受ける。内面には横方向のナデで、粘土紐の痕跡が目立つ。胎土はにぶい橙色で、粗く、砂礫は 5mm 以下でチャートが目立つ。146 は胴部片で、内面に一辺 0.5mm 前後の細かな布目が残る。胎土は黒～赤褐色、比較的硬質で、3mm 以下の砂礫が混じり、雲母もみられる。147 は高杯の杯と脚の接合部という意見もあったが、胎土が橙色で 5mm 前後の砂礫が多く混じること、内面にわずかにみられる格子状の痕跡が布目

下層 2（138 ～ 147）

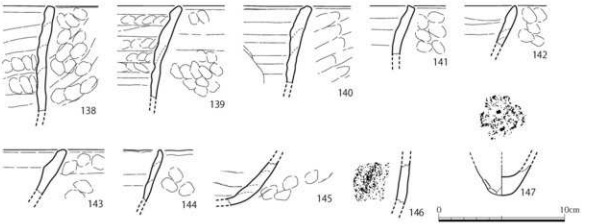



**図 24　SD001 出土遺物実測図（12）（S=1/3）**

と思われることから、製塩土器の尖底形の底部と考えた。

**木製品（148 ～ 167）**　148 は柄杓の柄先端側。身と結合させる釘穴から先端側にあたるもので、断面は円形であるが、先端に向かって次第に大きさを減じて尖るが、端部が若干欠損している。釘穴の位置から考えると、おそらく径 12cm 前後の身に取り付いていたことが想定できる。149 は曲物の底板。円形を呈し、厚さ 2 ～ 4mm、樺皮結合の綴じ孔と皮紐が 1 か所みられ、内面が一部黒変している。小片のため正確な復元は困難であるが、残存部位から径 15 ～ 20cm 前後が想定される。他に、図化は困難であったが厚さ 1 ～ 2mm の側板片が出土しており、残存する曲線からおそらく径 20 ～ 25cm 前後の円形を呈する曲物と思われる。結合孔に樺皮紐が貫通した状況がみられ、孔は 2 段残存しているが、紐の状態からは 3 段以上綴じられていたことが窺える（図版 27）。150 は長さ 19.0cm、厚さ 1.7cm、幅が上端 2.7cm、下端 2.2cm と、わずかに一端が狭くなっている長方形の板状不明製品。上端は 1.5cm、下端は 2.0cm の部分で四周に横線状に圧痕がみられるので、何らかの部材と結合していたものと思われる。151 は一端が欠損しているが各面は整形され、幅 2.2 ～ 2.4cm、厚さ 2.4cm を測る長方形の板状不明製品。上端の片側はカーブ状に整形されているようにみえ、それ以外は粗く切断された痕が残る。表裏面の片面には横方向の線状痕がみられる。152 は断面が不整形な棒状不明製品。欠損しており全容は不明だが、径 7mm の半円状に挟れた部分が炭化している。

153 ～ 167 は燃えさし。なお、図化していないものを含めると、本層より計 111 点出土している。長さでは、3 ～ 5cm 台（153・154）、7 ～ 9cm 台（155 ～ 160）、11 ～ 14cm 台（161 ～ 165）、16 ～ 17cm 台（165・166）がある。図化していないものについても、長さは 20cm を越えるものはなかった。153・154・156・157 は、厚さ 1 ～ 3mm と薄く、断面も長方形で板状を呈している。木口の切断痕は斜めにみられるものが大半である。そのうちの 154・162・165・166 は切断面が炭化している。156 や 165 は下端から削り取られたように薄くなっている。159 や 162 は炭化している端面側に貫通していない切傷痕がみられる。160 は全体的に方形で一端が尖っている箸状を呈しているようにみえるが、明確に何らかの製品だと断定できるのはなかった。第 4 章第 4 節で述べるように、掲載外の資料で樹種同定したものは全てヒノキである。

下層 2（148～167）

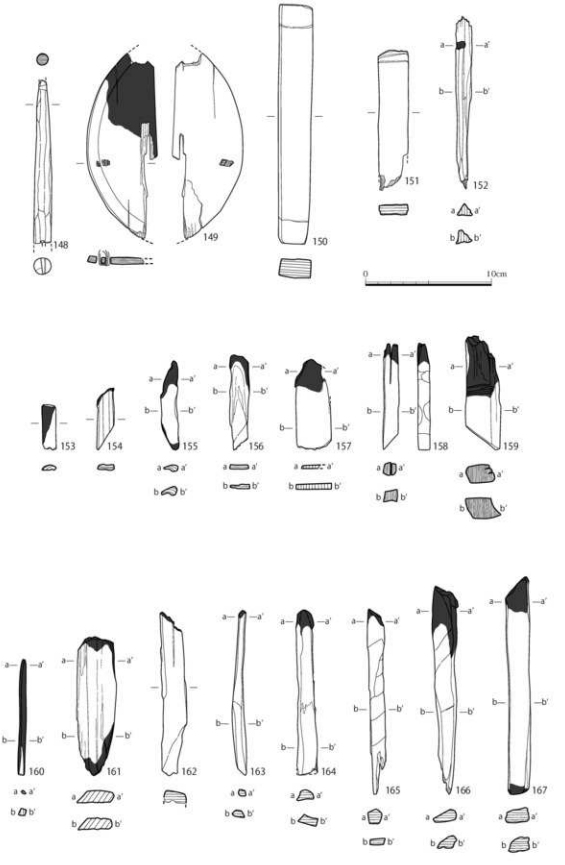



図 25　SD001 出土遺物実測図（13）（S=1/3）

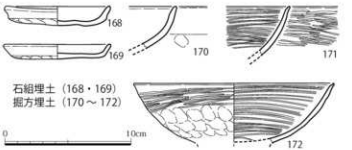



**図 26　SE003 出土遺物実測図（S=1/3）**

SD001 の出土土器類は、上～中層は古代が 8 ～ 10 世紀、中世が 11 ～ 13 世紀と時期幅がみられる。一方、下層と下層 2 から出土した土器類は、奈良時代に相当する 8 世紀のものにほぼ限られる。共伴して出土している木製品もその特徴から、奈良時代のものとして違和感はない。なお、第 5 章第 2 節で下層 2 出土資料を中心に奈良時代の土器について、主体時期や器種構成などの特徴について詳述する。

### 井戸

**SE003 出土遺物**（図 26、図版 27）

**土師器皿（168・169）**　口縁を強くナデを施し短く外反させて平坦な底部をもつ一群。共に口径は 8cm 台。

**土師器椀（170）**　椀 C。外面は口縁を幅狭くヨコナデする e0 手法。口縁端部はわずかに外反する。

**瓦器椀（171・172）**　大和型。外面のヘラミガキと口縁の形状からⅡ段階に収まるものと思われる。

これらの遺物は、168・169 が石組内、170 ～ 172 が掘方から出土している。170 は 8 世紀のものであるが、主体は 12 ～ 13 世紀のものである。

### 土坑

**SK006 出土遺物**（図 27、図版 27）

**土師器杯（173）**　杯 B。口縁端部は上方に肥厚させて丸くおさめ、高台は小さく三角形を呈する。外面は b1 手法。内面は口縁上部に連弧暗文、下半に一段暗文、その間隔は 2 ～ 4mm、見込みは螺旋暗文を施す。口縁外面上半の一部が黒変。

**土師器皿（174）**　皿 A。口縁上半を短く外反させて端部を上方に摘み上げる。外面は b0 手法。内面は一段暗文、その間隔は 7mm、見込みは螺旋暗文を施す。

**土師器鉢（175）**　内湾する器形をもつが、口縁は直立させ、端部は内側に丸く巻き込むもの。外面は b0 手法で、口縁から体部上半にかけて強いヨコナデ、内面体部にはおそらく間隔が広い螺旋暗文を施す。

**土師器甕（176）**　大きく外反する口縁で、端部は上方に摘み上げるもの。口縁外面は凹む。

**須恵器壺（177）**　平坦な底部にハの字状高台をもつ壺。

**木製品（178）**　曲物の側板で上半が欠損している。厚さは 2 ～ 3mm、復元径は 72cm 台。樺皮紐と結合孔が残存しており、1 列 3 段以上綴じられていたものと思われる。前節で説明したように、曲物は紐と孔の結合が外れていた状態で埋められていたので、出土時点では径 60cm であった。第 4 章第 4 節で述べるように、樹種はヒノキである。

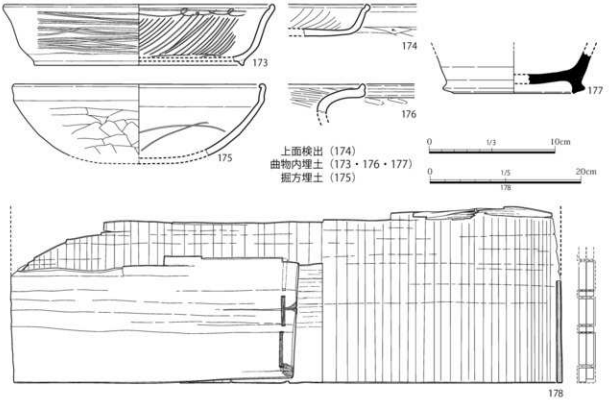



図 27　SK006 出土遺物実測図（S=1/3・1/5）

図 28　SP008 出土遺物実測図（S=1/3）

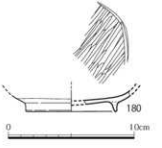



図 29　出土地不明遺物実測図（S=1/3）

これらの遺物は、178 が土坑内で据えられた曲物で、174 が土坑検出時に、そして 173・176・177 が曲物内、175 が掘方から出土している。時期的には 8 世紀のもので、SD001 下層及び下層 2 と大きく変わらない。

### ピット

**SP008 出土遺物**（図 28）

**瓦器椀（179）**　大和型。器面は摩滅しているが、口縁のヘラミガキと形状からⅡB～ⅢA 段階のものか。

**出土地点不明遺物**（図 29）

**黒色土器椀（180）**　内面を黒色処理した黒色土器 A 類。高台は細く仕上げる。

# 第４章　自然科学分析

## 第１節　越智遺跡から出土した大型植物遺体

### １．はじめに

越智遺跡の発掘調査で取り上げられた大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

### ２．試料と方法

試料は、肉眼で確認・回収された現地取り上げ試料の２試料で、奈良時代の７世紀前半のSD001の下層２から採取された１試料と、SK006の曲物内から採取された１試料である。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、高取町教育委員会に移管されることになっている。

### ３．結果

同定した結果、木本植物のモモ核とオニグルミ核の２分類群が得られた（表１）。

以下に、出土した大型植物遺体を遺構別に記載する。

SD001下層２：モモが32点（完形15点、動物食痕のある核１点、未熟核１点、半割６点、破片９点）とオニグルミ（半割）が２点得られた。

SK006曲物内：オニグルミ半割が１点得られた。

**表１　越智遺跡から出土した大型植物遺体**

| | 遺構 | SD001 | SK006 |
|---|---|---|---|
| | 出土位置・層位 | 下層２ | 曲物内理土 |
| 分類群 | 採取方法 | 現地取上げ | |
| モモ | 核（完形） | 15 | |
| | 核（動物食痕） | 1 | |
| | 未熟核（完形） | 1 | |
| | 核（半割） | (6) | |
| | 核（破片） | (9) | |
| オニグルミ | 核（半割） | (2) | (1) |

括弧内は破片数

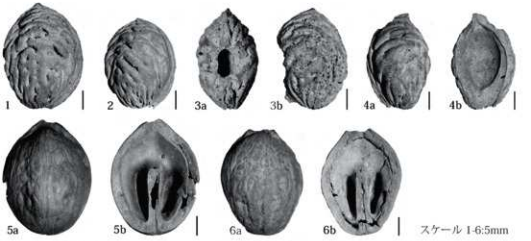
次に、得られた分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

（1）モモ　*Prunus persica* (L.) Batsch　核　バラ科

褐色～黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形個体は高さ28.6mm、幅21.6mm、厚さ17.5mm（図30-1）、高さ24.4mm、幅19.2mm、厚さ15.0mm（図30-2）、動物食痕のある個体は、高さ24.3mm、残存幅16.1mm、厚さ14.7mm（図30-3）、半割の個体は高さ26.7mm、幅17.6mm、残存厚6.8mm（図30-4）。

（2）オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam.　核　クルミ科

黄褐色～茶褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。溝や凹凸の間には微細な皺がある。内部は二室に分かれる。高さ29.5mm、幅22.7mm、残存厚11.1mm（図30-5）、残存高28.6mm、幅21.9mm、残存厚12.2mm（図30-6）。




1、2．モモ核（完形）（SD001 下層２）、3．モモ核（動物食痕）（SD001 下層２）、4．モモ核（半割）（SD001 下層２）、5．オニグルミ核（半割）（SK006 曲物内）、6．オニグルミ核（半割）（SD001 下層２）

**図 30　越智遺跡から出土した大型植物遺体**

## 4．考察

奈良時代の落ち辺み SD001 下層２から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物で果樹のモモの核と野生植物で食用として利用可能なオニグルミの核が得られた。

SD001 下層２から得られたモモ核は、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。あるいは、モモは食利用以外にも、観賞用や薬用、呪術用、祭祀用などさまざまな目的で利用されており（那須 2015）、何らかの用途に用いられた後に核の部分が捨てられた可能性が考えられる。出土した状態の良い完形 14 点の大きさを計測した結果、高さが平均 26.4 ± 1.9mm、幅が平均 20.3 ± 1.4mm、厚さが平均 16.2 ± 1.7mm で、縦長の傾向があった（表２）。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代では比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代のモモの核長は 23.6 ～ 26.6mm で、鎌倉時代には大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長 26.9mm、最大で 38.0mm 程度の核がみられるとしている。今回の SD001 下層２から出土したモモ核の大きさは、高さが平均 26.4 ± 1.9mm で、山梨県内の奈良・平安時代のモモ核の平均値に近かった（表２）。また、ネズミ類によるとみられる動物食痕が残るモモ核も確認された。半割のモモ核には打撃痕は見られず、自然に割れた可能性がある。オニグルミの核は、内部の子葉を利用するために割られた後、廃棄された可能性があるが、打撃痕がみられないため、自然に半分に割れた可能性が高い。

土坑 SK006 の曲物内からは、半割のオニグルミの核が得られており、内部の子葉を利用するために割られた後に廃棄され、土坑に堆積した可能性がある。

**表２　モモ核の大きさ**

| 遺構 | 高さ | 幅 | 厚さ |
|---|---|---|---|
| SD001 下層２ | 30.3 | 23.0 | 18.1 |
| | 28.6 | 21.6 | 17.5 |
| | 26.5 | 20.9 | 16.7 |
| | 27.7 | 20.8 | 16.4 |
| | 27.0 | 21.3 | 18.5 |
| | 25.9 | 20.3 | 15.9 |
| | 25.6 | 20.2 | 15.8 |
| | 25.9 | 20.7 | 16.4 |
| | 27.6 | 18.9 | 14.9 |
| | 26.4 | 20.9 | 16.6 |
| | 24.4 | 19.2 | 15.0 |
| | 22.3 | 16.9 | 11.5 |
| | 25.6 | 19.8 | 15.8 |
| | 25.9 | 20.1 | 17.9 |
| 最小 | 22.3 | 16.9 | 11.5 |
| 最大 | 30.3 | 23.0 | 18.5 |
| 平均 | 26.4 | 20.3 | 16.2 |
| 標準偏差 | 1.9 | 1.4 | 1.7 |

（単位：mm）

《引用文献》
那須浩郎（2015）縄文時代にヒエは栽培化されたのか？ SEEDS CONTACT，4，27-29.
新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集，Ⅳ，361-374，山梨県考古学協会．
米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

# 第２節　越智遺跡出土の動物遺体

## 1．はじめに

越智遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

## 2．試料と方法

試料は、越智遺跡のSD001下層２から出土した動物遺体１点である。時期は奈良時代（8世紀前半～半ば）と考えられている。試料を肉眼で観察し、標本との比較により分類群を同定した。

## 3．結果

同定の結果は、資料はウマの基節骨であった（表3）。近位関節面の形状から右側と推定される。遠位側の関節面がやや欠損しているが、全体的に保存状態は良い。骨の残存長は69.0mmを測る。なお、林田重幸と山内忠平の推定Ⅲ式（林田・山内1957）から体高を算出したところ、仮に前側の基節骨であった場合は体高約87cm、後側の基節骨であった場合は体高約108cmとなり、小型馬に近い個体と推定された。

**表３　越智遺跡出土動物遺体の同定結果**

| 試料No. | 遺構 | 層位 | 分類群 | 部位 | 左右 | 状態 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SD001 | 下層２ | ウマ | 基節骨 | 右？ | 遠位関節面やや欠損 |

《引用文献》
林田重幸・山内忠平（1957）馬における骨長より体高の推定法．鹿児島大学農学部学術報告，6，146-156.
松井　章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会．

**図31　越智遺跡出土の動物遺体**

# 第３節　越智遺跡出土石材の岩石同定

## 1．はじめに

越智遺跡で出土した石材について、肉眼観察および実体顕微鏡による石材同定を行った。

## 2．試料と方法

試料は、越智遺跡より出土した石材２点である（表４）。石材の同定は、肉眼観察および実体顕微鏡による観察を行った。

**表４　分析試料とその特徴**

| 分析 No. | 試料 | 遺構 | 層位 | 時期 | 試料の特徴 | 岩石名 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 岩石 | SD001 | 上・中層 | 中世～古代 | 灰色（7.5Y 4/1）、片岩組織、雲母多く含む | 雲母片岩 |
| 2 | 岩石 | SD001 | 下層 | 古代 | 灰黄色（2.5Y 7/2）、斑晶質（斑晶：石英・長石・輝石類）、流理構造、受熱痕 | 流紋岩 |

## 3．結果

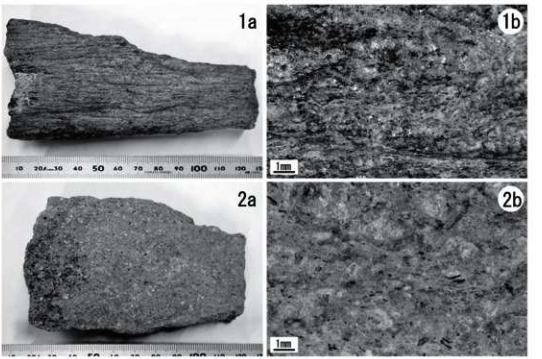
表４に、肉眼観察および実体顕微鏡による石材同定の結果を示す。なお、岩石は、色調や構成鉱物、岩石組織の特徴について観察した。以下に、代表的な石材の特徴について記載した（表４）。

（1）結晶片岩（分析 No.1、図 32-1a･1b）

灰色（7.5Y 4/1）の片岩組織からなり、雲母多く含む。

（2）流紋岩（分析 No.2、図 32-2a･2b）

灰黄色（2.5Y 7/2）の石英・長石・輝石類の斑晶からなる斑晶質であり、流理構造を示す。なお、片側面には受熱痕がある。




1a･1b.分析No.1（SD001、上・中層）　2a･2b.分析No.2（SD001、下層2）

**図 32　岩石試料の外観（a）と実体顕微鏡写真（b）**

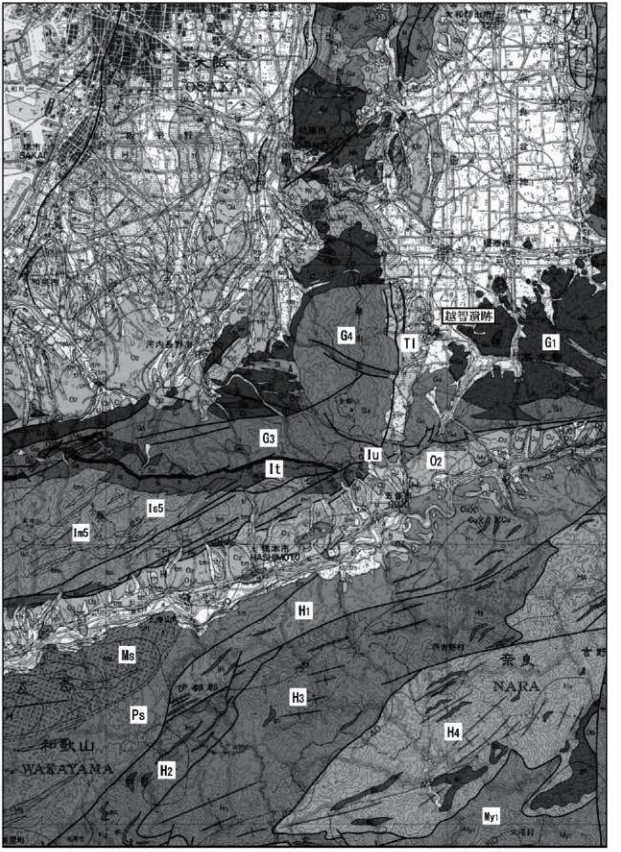
## 4．考察

遺跡周辺では、新しい時代の地層から、第四紀低位段丘堆積物（凡例 Tl）、紀の川右岸の更新世前期の大阪層群及び相当層（凡例 $O_3$）、白亜紀後期の和泉層群（泥岩や砂岩からなる凡例 It、Is5、Im5、Iu）、白亜紀後期の領家花崗岩類（凡例 $G_1$、$G_3$、$G_4$）と泉南流紋岩類（凡例 Se）、白亜紀の四万十帯日高川層群（主に頁岩からなる凡例 $H_1$ ～ $H_4$、砂岩頁岩互層からなる凡例 $My_1$）、白亜紀の三波川帯（三波川結晶片岩類からなる凡例 Ms、Ps）などが分布する（栗本ほか（1998）による図 33）。なお、新第三紀中新世前期 - 中期の室生層群の流紋岩溶結凝灰岩が約 20km 東側の奈良県宇陀市榛原檜牧周辺に分布する。

分析 No.1 の岩石が結晶片岩、分析 No.2 の岩石が流紋岩であった。これら岩石は、遺跡周辺では分布しない岩石である。結晶片岩は、紀の川下流域の三波川結晶片岩類（凡例 Ms、Ps）と考えられる。また、流紋岩は、白亜紀後期の泉南流紋岩類（凡例 Se）、あるいは遺跡から約 20km 東側の新第三紀中新世前期 - 中期の室生層群の流紋岩溶結凝灰岩などが考えられる。

《引用文献》

栗本史雄・牧本　博・吉田史郎・高橋裕平・駒沢正夫（1998）20 万分の 1 地質図幅「和歌山」. 地質調査所.




凡例T1：第四紀低位段丘堆積物、凡例$O_2$：大阪層群及び相当層、凡例It、Is5、Im5、Iu：白亜紀後期の和泉層群、
凡例$G_1$、$G_3$、$G_4$：白亜紀後期の領家花崗岩類と凡例Se泉南流紋岩類、凡例H1～H4、Myr：白亜紀の四万十帯日高川層群、
Ms、Ps：白亜紀の三波川帯（三波川結晶片岩類）

図 33　遺跡と周辺の地質（栗本ほか（1998）の 20 万分の 1 地質図幅「和歌山」を編集）

# 第４節　越智遺跡出土木製品の樹種同定

## 1. 樹種同定対象資料

奈良県高市郡高取町越智遺跡より出土した木製品６点（表５）について樹種同定を行った。

**表５　樹種同定対象資料**

| 番号 | 遺物名 | 出土遺構 |
|---|---|---|
| ① | 曲物（図 27-178） | １区 SK006 |
| ② | 燃えさし | １区 SD001 下層２ |
| ③ | 燃えさし | １区 SD001 下層２ |
| ④ | 燃えさし | １区 SD001 下層２ |
| ⑤ | 燃えさし | １区 SD001 下層２ |
| ⑥ | 燃えさし | １区 SD001 下層２ |

## 2. 樹種同定

### 1）同定方法

樹種同定に必要な横断面（木口面）、接線断面（板目面）、放射断面（柾目面）の３断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n－ブチルアルコール等の有機溶剤に順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製した。

### 2）使用機器

試料の観察には生物顕微鏡 Olympus BX-53 を、木材組織の顕微鏡写真撮影には顕微鏡デジタルカメラ Olympus DP-71 を使用した。

### 3）同定結果

試料の木材組織は顕微鏡写真（図 34・35）の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。

①　曲物（１区 SK006、図 27-178）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は晩材部、あるいは早材から晩材への移行部に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、２～21 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に２～３個を確認できる。

植生分布：本州（福島県以南の主として太平洋側）、四国、九州（屋久島まで）。

樹　　形：常緑高木で直幹性。樹高 30 m、胸高直径１m に達する。

用　　途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器等。

出土事例：建築部材（柱、垂木等）、木簡、祭祀具（斎串、形代等）、容器（曲物、桶、底板）、武器（刀剣鞘）、編み具・紡織具（糸巻具、編台等）、服飾具（下駄等）、食事具（折敷、箸等）等。

② 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-1）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行部に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 14 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 3 個が多い。

③ 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-2）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は、晩材部または早材から晩材への移行部に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 4 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 2 個、時に 3 個である。

④ 燃えさし（1 区 S001 下層 2-3）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は、晩材部または早材から晩材への移行部に点在あるいは接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 6 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 3 個、時に 4 個である。

⑤ 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-4）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。

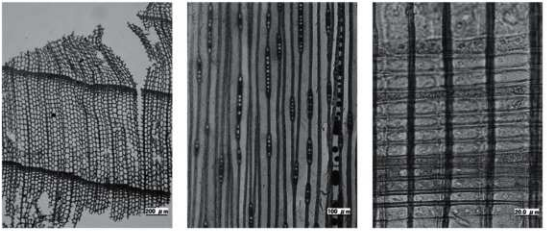
早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は晩材に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 6 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 2 個、時に 3、4 個である。

⑥ 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-5）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

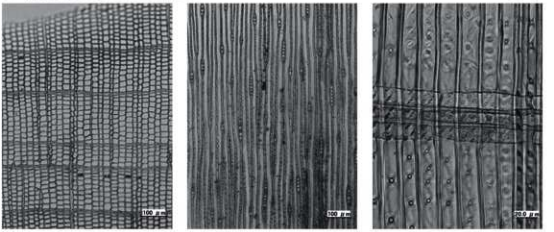
仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。木口面において仮道管壁が厚く丸味を帯び、ややアテ材の傾向が見える部分もある。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 6 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 2 個である。柾目面における分野壁孔の特徴からヒノキと判断した。

① 曲物（1 区 SK006）　ヒノキ



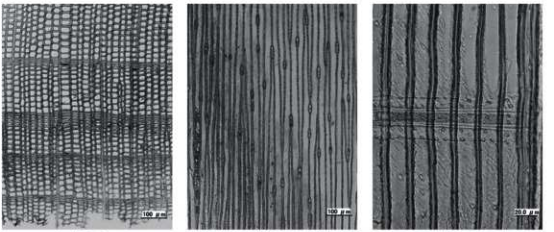

木口面　板目面　柾目面

② 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-1）　ヒノキ




木口面　板目面　柾目面

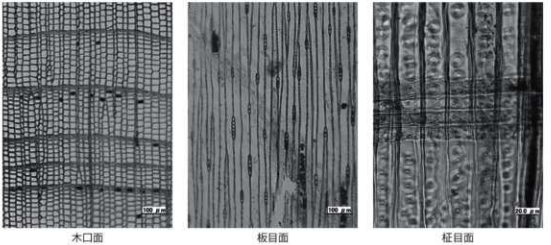
③ 燃えさし（1 区 SD001 下層 2-2）　ヒノキ




木口面　板目面　柾目面

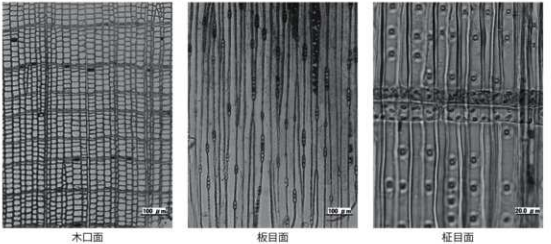
**図 34　木材組織顕微鏡写真（1）**

④　燃えさし（1 区 SD001 下層 2-3）　ヒノキ



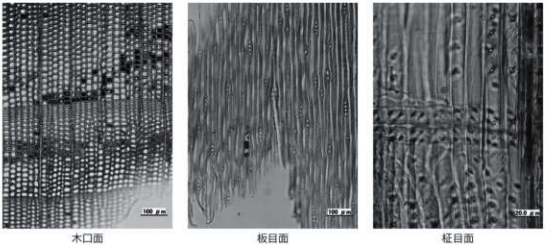

木口面　板目面　柾目面

⑤　燃えさし（1 区 SD001 下層 2-4）　ヒノキ




木口面　板目面　柾目面

⑥　燃えさし（1 区 SD001 下層 2-5）　ヒノキ




木口面　板目面　柾目面

**図 35　木材組織顕微鏡写真（2）**

## 3. 樹種同定結果について

今回樹種同定を行った木製品 6 点中、1 点は曲物（①）、5 点は燃えさし（②～⑥）である。

曲物は、側板の一部と考えられる部材より試料を採取し同定を行った。『木の考古学』出土木材用材データベースによれば、曲物側板にはヒノキとスギが多用される傾向がある。特に、奈良県内の遺跡より出土した奈良時代～平安時代の資料にはヒノキが多く、本遺跡の曲物側板もヒノキである点は従来の樹種傾向に合致する。

燃えさしについては、上述のデータベースでは「付け木」に分類されている。これによれば、奈良県内で出土し樹種が報告されている付け木は 67 点、そのうちヒノキは 35 点と約半数を占める。今回調査した燃えさし（②～⑥）は、すべてヒノキという結果を得た。

浦蓉子氏は、平城宮・京より出土した燃えさしについて、「火種をカマドや灯明などに移す際の着火具として火付け、火移しの用途が想定されている」とし、「棒状の先端部のみが焼け、先端部が斜め方向にカットされる」等の特徴を挙げる。このうち、その形状から、他の木製品を製作する際に生じた端材で、先端のみが意図的な火を受けた痕跡を有するものを「燃えさし」とする。浦氏の報告で興味深い点は、平城地区第 524 次調査（平城京左京二条二坊十四坪）において東西溝 SD10580 より出土した「燃えさし」に、年輪が詰まった割列材が使用されているという指摘である。こうした特徴は、今回樹種同定を行った燃えさし 5 点にも共通する点であり、年輪幅の狭さは図 34・35 に示す木材組織顕微鏡写真で確認できる。以上より、越智遺跡出土燃えさしについて、平城宮・京の事例と同様の木取りおよび用材選択の傾向を確認できた。

《参考文献》
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学』出土木材用材データベース、海青社
北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ、保育社
島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社
島地謙・佐伯浩ほか 1985『木材の構造』木材の科学・1、文永堂出版
林昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
深澤芳樹・浦蓉子 2021
『古代の灯火－先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究』基盤研究（C）15K03001 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

# 第５章　調査のまとめ

## 第１節　遺構の変遷

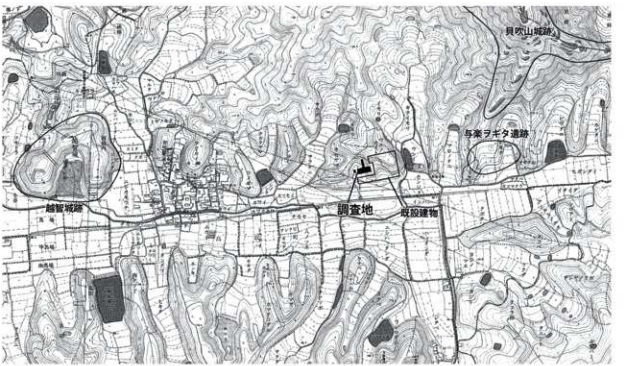
調査地は、越智谷を南に臨む貝吹山南麓の幾つもみられる尾根のやや幅が広くなった先端部に位置しており、東西は谷筋に囲まれている。旧地形図で微視的にみると、尾根先端の中でも周囲三方が２～３ｍの高まりに囲まれたくぼ地の東寄りにあたる。本調査で、調査区東半は地山が露出し削平を受けている状況が確認されており、既設建物の地形はくぼ地東側の高まりであったことが分かる（図 36）。

このような旧地形を考慮して、本調査で確認された遺構の変遷を大きく３時期に分けてみる。

**奈良時代（８世紀）**

当該期の遺構は、南北方向に延びる落ち込み SD001 の下層段階と、土坑 SK006 である。

SD001 は調査区外に延びているため全容は不明だが、南北 14m、東西 24m、深さ 2m 以上とかなりの規模を有する。当該期の埋土はグライ化が鮮明な一方で、掘削を中断し底面が確認できない現時点では顕著な湧水や滞水はみられず、ブロック土もそれほど目立たず人為的に埋め戻したかも断定できない。だが、調査地は尾根先端で深い谷とは考えにくいため本遺構は人為的に掘削された可能性が高く、後述するが奈良時代の前半・半ばと限定できる遺物がまとまって出土している。同様な立地でグライ化が顕著な遺構として、例えば調査区より南方２kmの薩摩遺跡で検出された溜池がある。しかし、本調査で堤や導水・排水施設が検出できたわけではないので、現時点ではその性格は不明と言わざるを得ない。




1972 年編集図、奈良県立橿原考古学研究所 2019『大和国条里復原図（複製版）』（奈良県立橿原考古学研究所提供）より一部追加して引用

**図 36　調査地周辺の旧地形図（S=1/10,000）**

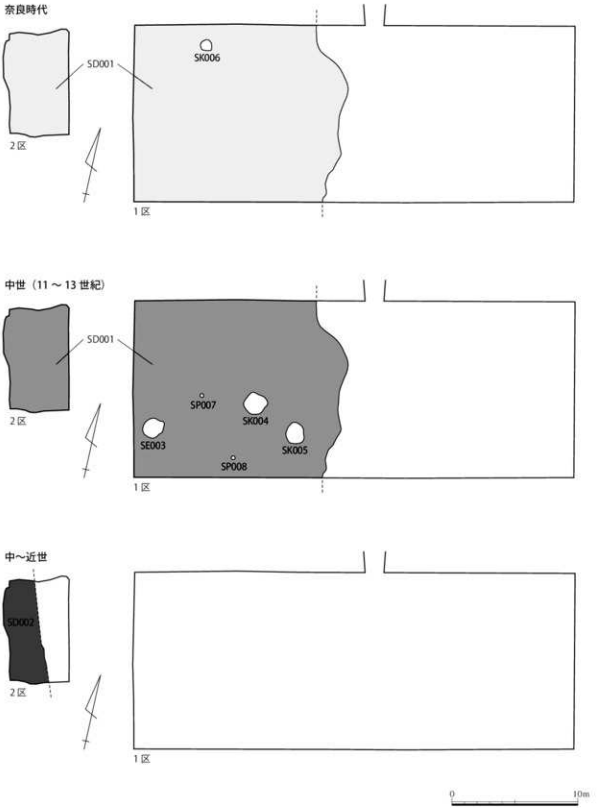



図 37　遺構変遷図（S=1/300）

SK006 は、SD001 の下層が埋まった時点で掘り込まれた曲物が据えられた土坑である。曲物組の井戸の可能性も考えうるが、深さも浅く湧水層には達していないことから、その性格は保留にしたい。時期的には、SD001 下層よりは新しいが、出土遺物では大きな時期差はみられない。

奈良時代の遺物には「越」などの墨書土器、製塩土器、柄杓、曲物、独楽状未製品、大量の燃えさしのほか、モモ・オニグルミ・ウマなどの自然遺物もあり、小面積の割には量・質とも豊富といえる。これらは都城や寺院、官衙などで多くみられるもので、本調査区周辺に何らかの施設があった可能性が想定される。

**中世（11 ～ 13 世紀）**

当該期の遺構は、SD001 の上～中層段階と、その前後に形成された井戸 SE003、土坑 SK004・005、ピット SP007・008 である。

SD001 の上～中層は古代～中世の遺物が混在してみられ、中層がやや古手の遺物がみられる傾向にはあるが、共にその主体は 11 ～ 13 世紀の土師器・瓦器椀である。上～中層ともに、南側へ向かって堆積が厚くなっており、土壌化も比較的みられることから耕作土や整地土と思われる。ただ細かくみると、上層では滞水がみられる土層があるなどの違いがあるが、上～中層は 13 世紀を下限とした耕作地または周辺に建物などがみられる環境であったことが想定される。

しかし、本調査区で検出された遺構のみでは、中世における具体的な土地利用や変遷を復元できる状況にはなく、周辺の調査成果を待つ必要があろう。中世には、本調査地が位置する丘陵周辺には与楽ヲギタ遺跡や越智城跡などが営まれている。つまり、中世の越智谷では幾つかの尾根に城館や集落などが点在していたものであろう。

**中～近世**

当該期の遺構は、SD001 西側の南北方向へ続く溝 SD002 である。SD002 は SD001 の上層を切っており、埋土からは少量だが古代～近世の遺物が出土することから、時期幅は中～近世と捉えたい。掘削時の湧水が著しく滞水もみられる堆積から、耕作等の用排水などの役割をもった溝と考えられる。

## 第２節　奈良時代土器の年代と特徴

本調査では、最も多く出土したものは奈良時代土器で、SD001 下層・下層２、SK006 において、時期的な混在がなく単独で出土している。特に SD001 下層２を中心に多く出土しているが、先述したように本層は下層の下位において重機で掘削した確認トレンチから出土したもので、任意的な層位と言える。しかし下層２出土土器は、人力掘削で行った下層の上位と大きな種類や時期の差はみられず、破片も大きく接合するものも多く良好な資料と考えた。そこで、第３章第３節の記述を踏まえて、SD001 下層２を中心に奈良時代土器の主体年代や特徴的な資料について若干のまとめをする。

**器種構成と主体年代**

SD001 下層２出土土器について、掲載外の遺物を含めた分類・集計を行った（表 6）。それによると、土師器が約 80%、須恵器が約 15%、残りはほぼ製塩土器である。土師器は、煮炊具である甕・鍋が３割で、供膳具が大半である。須恵器は、壺・瓶・甕などの貯蔵具は２割で、やはり供膳具が大半である。平城宮と比較すると、供膳具が過半数以上であることは通例だが、やや煮炊具が多い傾向と言えよう（神野・森川 2010、409p）。

## 表 6　SD001 下層 2 出土土器集計

| 種類 | 器形 | 部位 | | 小計 | 被熱痕 | 個体数 | 比率 (%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯A | 口縁 | 二段 | 23 | 4 | 62 | 18.7 |
| | | | 逆弧 | 2 | | | |
| | | | 一段 | 34 | | | |
| | | | なし | 3 | | | |
| | 杯B | 高台 | | 6 | 1 | 6 | 1.8 |
| | | 蓋口縁 | | 1 | 1 | | |
| | 杯C | 口縁 | | 17 | 1 | 17 | 5.1 |
| | 杯H | 口縁 | | 19 | 2 | 19 | 5.7 |
| | 皿A | 口縁 | | 25 | 3 | 25 | 7.5 |
| | 皿B | 高台 | | 2 | 1 | 2 | 0.7 |
| | 皿H | 口縁 | | 1 | 1 | 1 | 0.3 |
| | 高杯 | 杯部 | | 10 | | 10 | 3.0 |
| | 椀C | 口縁 | | 21 | 3 | 21 | 6.3 |
| | 杯・椀・皿 | 口縁 | | 19 | 2 | 19 | 5.7 |
| | 鉢 | 口縁 | | 8 | | 8 | 2.4 |
| | 小形壺 | 口縁 | | 1 | − | 1 | 0.3 |
| | 甕・鍋 | 口縁 | | 75 | − | 75 | 22.6 |
| | | 把手 | | 7 | − | | |
| | 甑 | 体部 | | 1 | − | 1 | 0.3 |
| | 不明器 | 口縁 | | 4 | | − | − |
| | 計 | | | 228 | 19 | 267 | 80.4 |
| 須恵器 | 杯A | 口縁 | | 6 | | 6 | 1.8 |
| | 杯B | 高台 | | 9 | 1 | 12 | 3.6 |
| | | 蓋口縁 | | 12 | | | |
| | 杯A・B | 口縁 | | 10 | | 15 | 4.5 |
| | 杯L | 口縁 | | 2 | | 2 | 0.7 |
| | 高杯 | 高台 | | 1 | | 1 | 0.3 |
| | 鉢 | 体部 | | 1 | | 1 | 0.3 |
| | 壺 | 口縁 | | 2 | − | 2 | 0.7 |
| | | 蓋口縁 | | 2 | − | | |
| | 平瓶 | 体部 | | 1 | − | 2 | 0.7 |
| | 横瓶 | 口縁 | | 1 | − | 2 | 0.7 |
| | 甕 | 口縁 | | 4 | − | 4 | 1.2 |
| | 不明器 | 口縁 | | 1 | − | − | − |
| | 計 | | | 29 | 1 | 47 | 14.5 |
| 黒色土器 | 甕 | 口縁 | | 1 | − | 1 | 0.3 |
| 製塩土器 | | 口縁 | | 16 | − | 16 | 4.8 |
| | | 体部 | | 91 | − | | |
| | | 底部 | | 1 | − | | |
| 総計 | | | | 366 | 20 | 331 | 100.0 |

※ 1　掲載外について体部しかない器種以外は集計していない。
※ 2　掲載分の底部・体部のみは集計に入れていない。
※ 3　土師器甕・鍋の口縁数については、3cm 角程度以上のものを集計。
※ 4　最低個体数は、体部や高台しかない器種を除き、口縁数のみで算出。
※ 5　器種不明の器は最低個体数を算出していない。

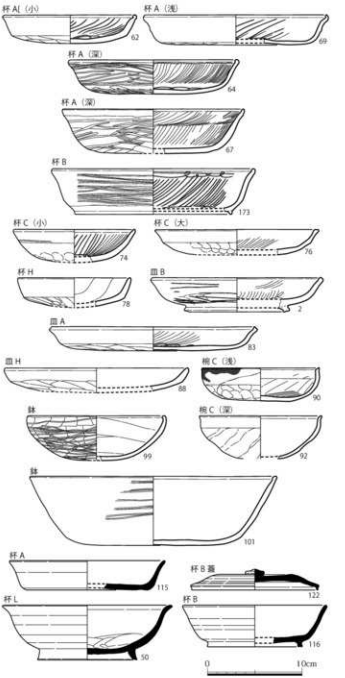



図 38　奈良時代の土器・供膳具（S=1/4）

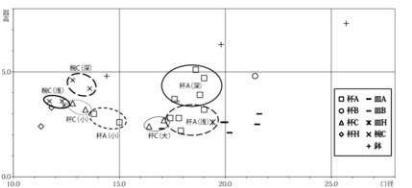



図 39　土師器供膳具径高分布

主体年代について、供膳具を中心に平城宮土器との比較から検討する（図 38）。供膳具では土師器の種類が豊富で、量的には杯 A が最も多く、皿 A、椀 C、杯 H、杯 C の順となる。この中で年代的に古い傾向のものは、土師器杯 A のうち内面に二段暗文が 4 割占めることや杯 H や皿 H がみられることが挙げられ、平城宮土器 I（飛鳥Ⅴ）に相当する。しかし須恵器において、杯 A が浅めの器形や杯 B 身の高台が直立気味であることと、杯 B 蓋に返りがみられないことなどは、平城宮土器Ⅱ～Ⅲにみられる傾向である。また、土師器杯 A では大半に内面の暗文がみられることは、新しくみても平城宮土器Ⅲには収まるものと言えよう（巽 1991、森川 2011）。さらに、土師器椀 C が一定量みられる一方で、椀 A が出土していない点からは、平城宮土器Ⅲは幾つかの細分案が出されているが、いずれにせよその古い段階と考えられる（玉田・巽 1995、神野 2005、神野・森川 2010）。なお、土師器供膳具について口径と器高による径高分布をみると、杯 A･C、椀 C において大小 2 種程度の法量分化がみられた。ただ、平城宮などでみられる口径 25cm以上を越える大型のものはほとんどない（図 39）。

以上、SD001 下層 2 を中心とした奈良時代土器は、平城宮土器 I に遡る可能性があるものも一部みられるが、その主体は平城宮土器Ⅱ～Ⅲの間、8 世紀前半～半ばの年代幅が考えらえよう。なお、奈良盆地南部において平城宮土器Ⅱ～Ⅲを主体とする土器群には、一部に平城宮土器Ⅳに下るものもみられるが、藤原宮東西大溝 SD4130 中層土器群がある。本資料と比較すると、土師器杯 A の暗文構成や椀 C の形態などのほか胎土や調整の全体的な雰囲気や、また杯 H もみられることなどの器種構成も類似していた（若杉 2017）。また、平安時代が主体とされる薩摩遺跡でも SD1303 下層出土土器などは土師器椀 C が比較的多くあるなど、奈良時代の様相は類似している可能性がある（奈良県立橿原考古学研究所 2015）。

**墨書土器**

本遺跡では奈良時代の墨書土器が 8 点出土している（図 40）。書かれた文字は、可能性があるものを含めて「越」4 点（81・119・122・123）、「木」2 点（80・89）、「器」1 点（68）、「継ヵ」または「伴ヵ」1 点（121）である。80・89・121・122 については二分の一に満たない小破片であるが、現状では一字のみ記されたものと考えられる。墨書は 122･123 が蓋裏、他は外底に書かれている。また、「越」の字体については、81・119・122 をみると、部首である「走」に対して右側の「戉」が低めに配置される点が類似する印象を受ける。123 も部首の一部しか残っていないが、上半部が 81 に近い形と思われる。あくまでも表面的な印象であるが、4 つの字体は非常に類似したものと捉えている。

本資料での文字の類例については、『奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成』（山本編 2021）によると「器」19 点、「木」11 点、「継」1 点、「伴」1 点であった。これらは、平城宮を含めた平城京域で出土したもので、確認できた範囲では奈良時代の須恵器か土師器の供膳具であった [(1)]。あくまでも管見ではあるが、旧大和国周辺ではこれらの字の例はなく、都城や官衙に関連する資料と言えるのではないか。他方、「越」の一字は墨書土器、または木簡でも確認できなかった [(2)]。なお、奈良県内の墨書土器は都城以外には、古道沿いの遺跡で出土する傾向が指摘されている（山本編 2021）。

墨書土器に関連するものとして、墨痕と摩滅痕がみられた転用硯が 4 点出土している。その内訳は、全て須恵器で、杯 B 蓋 2 点（122・126）、高杯 1 点（128）、鉢 1 点（129）である。

このように墨書土器と転用硯が複数出土しており、類似性が高いと考えられる「越」の字体などから、奈良時代の本遺跡周辺に識字者の存在が指摘できよう。

**供膳具の使用痕**

供膳具の使用痕として、前述の墨書に加えて、線刻と二次被熱、漆付着がみられる。

線刻については土師器５点にみられ（1・23・68・83・101）、全て底部内外面に複数の直線で十字などを刻んでいる。特に 68 は、見込みに「井」状に描いている。

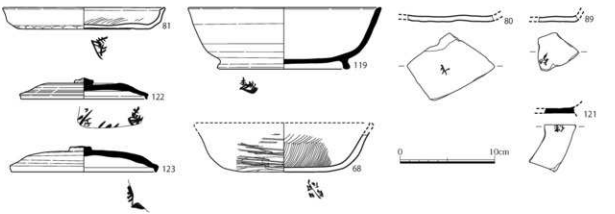
二次被熱は、土師器及び須恵器の杯皿を中心に口縁や内面において二次的に煤の付着や黒変していることを指す。古代の都城や官衙遺跡、寺院跡を中心に二次被熱痕がみられるものが出土しており、主に灯明皿として使用されたことが指摘されている（神野 2020）。SD001 下層２出土土器での集計であるが、二次被熱は土師器 19 点、須恵器１点の計 20 点にみられた。今回は、明らかに煤が付着しているものと、明確に黒変しているもののみを対象とした。

漆付着は、土師器杯 A の破片断面にみられる漆継ぎ痕（40）、土師器皿 A の内面全体に黒漆の塗布（84）がある。後者には口縁に煤付着もみられるので、二次被熱との関連性について今後の検討が必要である。

**製塩土器**

SD001 下層では１点、下層２で 108 点が出土している。大半は筒形の体部をもち胎土が灰黄～灰白色で 5㎜以下の砂礫がみられるもの（54・138 ～ 141）で、和泉・紀伊産とされる積山５類及び神野Ⅱ類に相当するものと思われる。口縁が開き気味で砲弾形となるもの（143 ～ 145）、内面に布目痕があるもの（146・147）は、本遺跡では資料数が少ないことから、現時点では判断を保留しておきたい。

製塩土器は都城や官衙遺跡などで出土する傾向が周知されているが、第２章で述べたように高取町




墨書部分赤外線写真（奈良文化財研究所撮影）：原寸

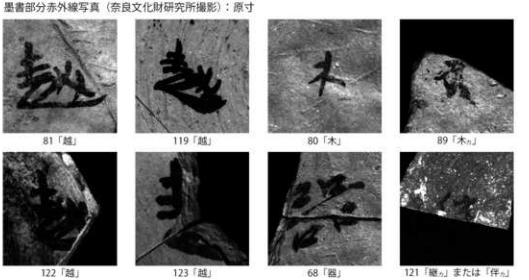



**図 40　越智遺跡出土墨書土器**

内の観覚寺遺跡や薩摩遺跡で出土している。これらは８～９世紀を主体とする遺跡であり、実見したところ筒形のものが大半である点は共通していたものの、布目痕があるものは確認できなかった。

## 第３節　奈良時代における越智遺跡周辺の歴史環境

越智遺跡は、出土土器から８世紀前半～半ばを主体として、墨書土器や製塩土器や燃えさしなど官衙や寺院などでみられる遺物が出土した。しかし、小面積の調査かつ建物など遺構の様相が乏しい現状では、その性格を確定するには尚早である。それでも、奈良時代の遺跡が少ない奈良盆地南部において本調査は貴重な成果であり、第２章の記述も踏まえて周辺の歴史環境を整理することでまとめにかえたい。

越智谷など飛鳥地域西方の丘陵には、天皇（大王）などの墓と考えられる終末期古墳が多く造られた。『万葉集』では、柿本人麻呂が持統天皇５（691）年に薨去した川島皇子を「越智野」に葬ったときに誄ったが、その墓についてはこれまで言及されていない。一方、『日本書紀』では天智天皇６（667）年に斉明天皇と孝徳皇后の「小市岡上陵」への合葬、天武天皇８（679）年に「越智」への行幸などの記事があり、斉明天皇の墓としては、牽牛子塚古墳や岩屋山古墳などが想定されている（西光 2002）。

奈良時代になると越智遺跡のほか、各々 2km 離れた南方に観覚寺遺跡や薩摩遺跡、西方に観音寺本馬遺跡がみられるが、遺構・遺物が多くなるのは平安時代以降とされる。『続日本紀』では、天平 14（742）年に「越智山陵」が崩壊し、鈴鹿王らを派遣して修理したという記事がある。確かに越智遺跡の主体年

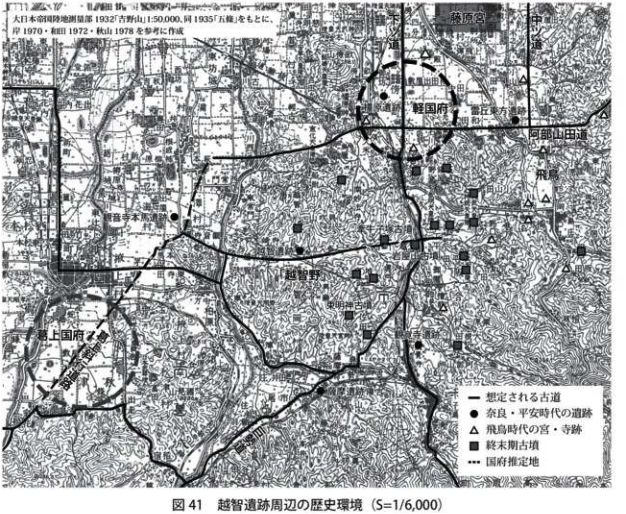



図 41　越智遺跡周辺の歴史環境（S=1/6,000）

代である８世紀前半～半ばに最も近いが、さらに具体的に実証を進めていく必要があろう。

飛鳥地域における奈良時代の遺跡は雷丘東方遺跡が著名で、「小治田宮」と記された墨書土器が出土し、『続日本紀』での天平宝字４（760）年に淳仁天皇が行幸した小治田宮であると考えられている（相原・光谷 2002）。また、天平神護元（765）年に称徳天皇が紀伊国へ行幸する途中に小治田宮、草壁皇子の檀山陵を通過したとされ、後者は束明神古墳とする見解もある（河上 1999）。このような状況から、飛鳥～奈良時代の「越智野」では、天皇の行幸や陵墓の築造・修理などが度々あったことは想定されよう。

越智遺跡の立地を確認すると、西に開ける細長い越智谷に南面して遠方の葛城山が見える一方、平地も狭く全体的に丘陵に囲まれている。越智谷を挟むように、下ツ道から続く巨勢道が東、小治田宮を通る阿部山田道から想定されている葛上斜向道路が西に飛鳥時代には存在していたとされる（岸 1970、秋山 1978 など）。そして大和国府はこれらの道と関係して、当初は葛上郡掖上にあって、平城遷都に伴って高市郡軽に移転したとする見解がある。これによると、飛鳥から難波へ至るには、「越智野」を突っ切り葛上国府が推定される掖上へ出て、水越峠を越えるというルートが提示されている（和田 1972）。しかし、軽国府は橿原遺跡が候補地の一つと挙げられているが（平川 1995）、葛上国府はまだ具体的な遺跡は明らかになっていない（山本編 2021）。

越智遺跡と交通路や大和国府などの官衙との関連については、今後さらなる調査研究が必要である。ただ、本遺跡は、飛鳥地域と葛城地域を結ぶ「越智野」において、奈良時代前半期を主体とした官衙的な性格が強い遺物を多く出土したことは、大和盆地南部の地域史及び日本古代史研究の進展において重要な成果であろう。

《註》

（1）『奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成』（山本編 2021）において、一文字で書かれていると判断できたものを抽出した。以下、文字ごとに掲載 No を示した。「器」…761・4190・4840・4841・4844・4845・4848・4863・4868・4944・4966・5463・5477・5922・6069・6146・6385・6449・7504 「木」…175・5280～5284・5379～5381・6472・6473 「鏃」…4905、「佇」…5181

（2）奈良文化財研究所データベース木簡庫（https://mokkanko.nabunken.go.jp/）により検索を行った。

《参考引用文献》

相原嘉之・光谷拓実 2002
「小治田宮の井戸－井戸枠の年輪年代と出土土器－」『明日香村文化財調査研究紀要』第２号　明日香村教育委員会
秋山日出雄 1978「第１章第２節　大和国」『古代日本の交通路』Ⅰ　大明堂
河上邦彦 1999「束明神古墳の被葬者」『束明神古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所・高取町教育委員会
岸敏男 1970「大和の古道」『日本古文化論攷』吉川弘文館
西光慎治 2002「飛鳥地域の地域史研究（3）今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第２号　明日香村教育委員会
神野恵 2005「聖武朝の土器－平城宮－」『古代の土器研究－聖武朝の土器様式－』古代の土器研究会
神野恵 2020
「古代都城の灯火器－灯火痕観察のススメ－」『第 23 回古代官衙・集落研究会報告書　灯明皿と官衙・集落・寺院』奈良文化財研究所
神野恵・森川実 2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社
巽淳一郎 1991「第Ⅵ章２　土器」『平城宮発掘調査報告Ⅹ Ⅲ』奈良国立文化財研究所
玉田芳英・巽淳一郎 1995
「第５章３　土器」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良国立文化財研究所
奈良県立橿原考古学研究所 2015『薩摩遺跡Ⅱ』奈良県橿原考古学研究所調査報告第 165 集
平川南 1995
「古代国府関係史料集（その３）－国府痕および国府推定地出土墨書・刻書土器集成（稿）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 63 集
森川実 2011「第Ⅵ章５　土器」『平城宮発掘調査報告ⅩⅦ－第一次大極殿地区の調査２－』奈良文化財研究所
若杉智宏 2017
「第Ⅵ章 2A　SD4130・SE4740 出土土器の検討」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』奈良文化財研究所
山本崇編 2021『奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成　上・下』埋蔵文化財ニュース第 185・186 号　奈良文化財研究所
和田萃 1972 「大和国府について」『国史論集』赤松俊秀教授退官記念事業会

# 関連資料

図 42　検出遺構配置略図
表 7 ～ 13　報告遺物一覧（1）～（7）
表 14　検出遺構および出土遺物一覧

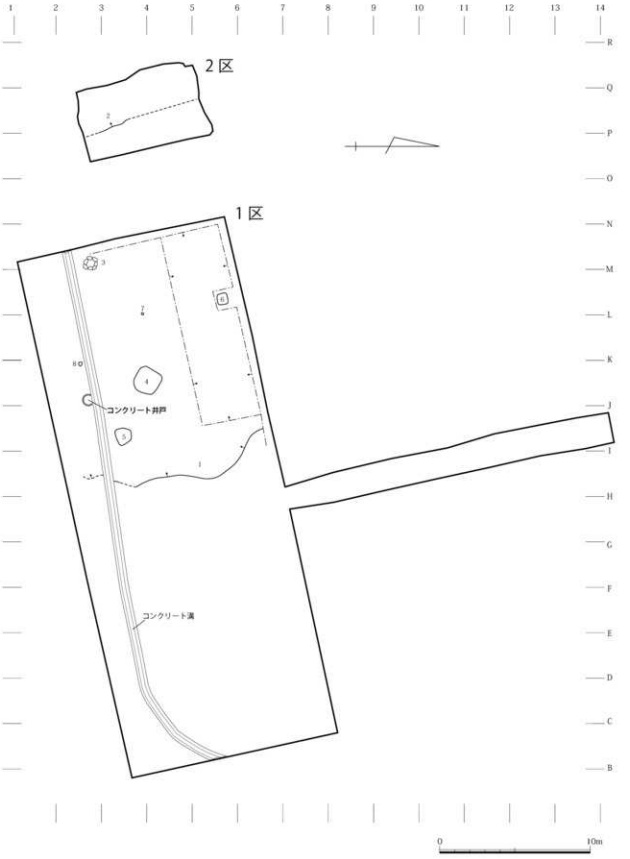



図 42　検出遺構配置略図（S=1/250）

## 表７　報告遺物一覧（1）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構 層位 | 種別 器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 図 13 | | SD001 西壁側溝 | 土師器 杯 | (13.4) | 3.2 | * | | 20% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR6/6 | 杯C 線刻 |
| 2 | 図 13 | 図版 14 | SD001 西壁側溝 | 土師器 皿 | (17.7) | 3.6 | (9.9) | | 25% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 皿 B |
| 3 | 図 13 | | SD001 西壁側溝 | 須恵器 皿 | * | (2.3) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N8/0 | 皿 C |
| 4 | 図 13 | | SD001 西壁側溝 | 須恵器 甕 | * | (8.7) | * | | 口縁部片 | 密 ～ 2mm 石英・長石 | 良 灰 N5/0 | |
| 5 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 椀 | (12.4) | (3.6) | * | | 20% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR7/6 | 椀 A |
| 6 | 図 14 | | SD001 上層 | 須恵器 壺 | * | (5.0) | (9.8) | | 底部 35% | やや密 ～ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | |
| 7 | 図 14 | 図版 14 | SD001 上層 | 灰釉陶器 壺 | * | (3.6) | * | | 底部片 | 密 微小砂粒 | 良 灰白 N8/0 | |
| 8 | 図 14 | 図版 14 | SD001 上層 | 緑釉陶器 椀 | * | (1.9) | 6.0 | | 底部 70% | 密 微小砂粒 | 良 灰白 N8/0 | |
| 9 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 皿 | * | 1.6 | * | | 体部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母 | 良 にぶい橙 7.5YR6/3 | |
| 10 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 皿 | (8.2) | 1.1 | * | | 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 赤橙 10R6/6 | |
| 11 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 皿 | (8.7) | 1.4 | * | | 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | |
| 12 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 皿 | (11.4) | 1.9 | * | | 35% | 粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 不良 橙 2.5YR6/8 | |
| 13 | 図 14 | | SD001 上層 | 土師器 釜 | (26.4) | (5.6) | * | | 20% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート | 良 橙 2.5YR7/8 | |
| 14 | 図 14 | | SD001 上層 | 瓦器 椀 | * | (4.3) | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 灰 N5/0 | |
| 15 | 図 14 | | SD001 上層 | 瓦器 椀 | (14.7) | (3.8) | * | | 30% | やや密 微小砂粒 | 良 灰 N4/0 | |
| 16 | 図 14 | | SD001 上層 | 瓦器 椀 | * | (4.0) | (4.9) | | 底部 35% | やや密 微小砂粒 | 良 灰 N4/0 | |
| 17 | 図 14 | | SD001 上層 | 瓦器 椀 | * | (2.4) | (4.7) | | 底部 45% | やや密 微小砂粒 | 良 灰 N5/0 | |
| 18 | 図 14 | | SD001 上層 | 瓦器 皿 | * | (1.4) | * | | 体部片 | 密 微小砂粒 | 良 灰 N6/0 | |
| 19 | 図 14 | 図版 14 | SD001 上層 | 輸入磁器 白磁椀 | * | (2.9) | * | | 口縁部片 | 密 ～ 1mm 黒色粒 | 良 灰白 2.5Y8/1 | |
| 20 | 図 14 | 図版 14 | SD001 上層 | 石製品 砥石 | 17.5 | 5.6 | 4.4 | 462 | | 結晶片岩 | | |
| 21 | 図 14 | | SD001 上層 | 木製品 不明 | (21.5) | (7.1) | 1.0 | | | | | 心材 |
| 22 | 図 15 | 図版 14 | SD001 上層 | 木製品 不明 | 51.8 | 5.8 | 3.9 | | | 竹 | | |
| 23 | 図 15 | 図版 15 | SD001 上・中層 | 土師器 杯 | (17.4) | 2.8 | * | | 40% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 杯 A 線刻 |
| 24 | 図 15 | | SD001 上・中層 | 緑釉陶器 椀 | * | (2.5) | * | | 口縁部片 | 密 微小砂粒 | 良 灰白 10YR8/1 | |
| 25 | 図 15 | 図版 14 | SD001 上・中層 | 土師器 皿 | (11.1) | 2.1 | * | | 35% | やや密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 灰白 10YR8/2 | |
| 26 | 図 15 | 図版 14 | SD001 上・中層 | 瓦質土器 鉢 | * | (4.5) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母 | 良 灰 N5/0 | |
| 27 | 図 15 | 図版 15 | SD001 中層 | 瓦質土器 釜 | (22.1) | (4.6) | * | | 20% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 灰白 7.5YR8/2 | |
| 28 | 図 15 | 図版 15 | SD001 上・中層 | 石製品 不明 | (9.4) | (10.2) | 6.7 | (717) | | 砂岩 | | |

## 表 8　報告遺物一覧（2）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構 層位 | 種別 器種 | 口径（長） 器高（幅） 底径（厚） 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 29 | 図 15 | 図版 15 | SD001 上・中層 | 木製品 不明 | (6.1) － 5.4 － (3.6) | | | | 心持材 施策未成品？ |
| 30 | 図 15 | | SD001 上・中層 | 木製品 不明 | 4.3 － 4.0 － 3.6 | | | | 心持材 |
| 31 | 図 15 | | SD001 中層 | 土師器 皿 | ＊ －(2.6)－ ＊ | 体部片 | やや粗 ～2mm 石英・長石・雲母 | 良 にぶい橙 7.5YR7/4 | |
| 32 | 図 15 | | SD001 中層 | 瓦器 椀 | ＊ －(2.4)－(5.6) | 底部 70% | やや粗 ～1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 灰 N5/0 | |
| 33 | 図 16 | 図版 16 | SD001 中・下層 | 土師器 高杯 | ＊ －(1.2)－ ＊ | 口縁部片 | 密 ～1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 高杯 A |
| 34 | 図 16 | 図版 16 | SD001 中・下層 | 土師器 杯 | ＊ －(3.0)－ ＊ | 体部片 | やや粗 ～1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 A |
| 35 | 図 16 | 図版 16 | SD001 中・下層 | 須恵器 提瓶 | ＊ －(3.4)－ ＊ | 肩部 35% | 密 ～3mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | |
| 36 | 図 16 | | SD001 中・下層 | 須恵器 甕 | ＊ －(3.3)－ ＊ | 口縁部片 | 密 ～5mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | |
| 37 | 図 16 | | SD001 中・下層 | 土師器 釜 | ＊ －(10.1)－ ＊ | 口縁部片 | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート | 良 橙 2.5YR6/6 | |
| 38 | 図 16 | 図版 16 | SD001 中・下層 | 土師器 釜 | (22.4)－(4.1)－ ＊ | 25% | やや粗 ～3mm 石英・長石・雲母・チャート | 良 灰白 10YR8/2 | |
| 39 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 杯 | (15.0)－ 2.6 － ＊ | 25% | 密 ～1mm 石英・長石 | 良 黄橙 7.5YR7/8 | 杯 A |
| 40 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 杯 | (17.8)－ 2.8 － ＊ | 10% | 密 ～1mm 石英・長石 | 良 浅黄橙 7.5YR8/4 | 杯 A 漆膜才痕 |
| 41 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 皿 | (19.9)－ 2.6 － ＊ | 10% | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート | 良 橙 5YR7/6 | 皿 A |
| 42 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 皿 | (20.0)－ 2.6 － ＊ | 10% | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/8 | 皿 A |
| 43 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 土師器 皿 | (20.2)－ 2.1 － ＊ | 10% | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 7.5YR7/6 | 皿 A 線刻 |
| 44 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 椀 | ＊ －(3.0)－ ＊ | 体部片 | やや密 微小砂粒 | 良 橙 5YR7/6 | 椀 C |
| 45 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 土師器 鉢 | ＊ －(7.2)－ ＊ | 口縁部片 | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート | 良 橙 2.5YR6/8 | |
| 46 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 土師器 甕 | (30.3)－(5.0)－ ＊ | 口縁部 20% | やや粗 ～4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート | 良 明褐灰 7.5YR7/2 | |
| 47 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 甕 | (16.9)－(6.3)－ ＊ | 口縁部 10% | 粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫 | 不良 にぶい橙 5YR7/4 | |
| 48 | 図 17 | | SD001 下層 | 土師器 甕 | (13.2)－(3.9)－ ＊ | 口縁部 25% | やや粗 ～2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR7/8 | |
| 49 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 須恵器 杯 | (14.6)－ 4.6 －(10.8) | 25% | やや粗 微小砂粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 B |
| 50 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 須恵器 杯 | (17.2)－ 5.8 －(10.4) | 25% | やや粗 ～1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | 杯 L |
| 51 | 図 17 | | SD001 下層 | 須恵器 蓋 | (21.2)－(2.1)－ ＊ | 10% | やや粗 ～3mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 B 蓋 |
| 52 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 須恵器 甕 | ＊ －(6.9)－ ＊ | 口縁部片 | 密 ～3mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | |
| 53 | 図 17 | | SD001 下層 | 須恵器 甕 | ＊ －(7.7)－ ＊ | 口縁部片 | 密 ～5mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | |
| 54 | 図 17 | | SD001 下層 | 製塩土器 | ＊ －(4.0)－ ＊ | 口縁部片 | 粗 ～5mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 灰白 10YR8/2 | |
| 55 | 図 17 | 図版 16 | SD001 下層 | 金属製品 釘 | (7.8)－ 1.6 － 1.5 －(10.9) | | 鉄 | | |
| 56 | 図 18 | 図版 17 | SD001 下層 | 木製品 曲物底板 | 13.2 － 14.0 － 1.0 | | | | 板目取り |

## 表 9　報告遺物一覧（3）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構層位 | 種別器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 57 | 図 18 | 図版 17 | SD001 下層 | 木製品 板 | (19.8) | 4.6 | 5.1 | | | | | 芯持材 |
| 58 | 図 18 | 図版 17 | SD001 下層 | 木製品 燃えさし | 17.9 | 1.3 | 0.8 | | | | | 板目取り |
| 59 | 図 18 | | SD001 下層 | 木製品 燃えさし | 12.8 | 1.7 | 1.2 | | | | | 柾目取り |
| 60 | 図 18 | | SD001 下層 | 木製品 燃えさし | 16.6 | 1.6 | 0.5 | | | | | 柾目取り |
| 61 | 図 18 | | SD001 下層 | 木製品 燃えさし | 25.0 | 2.0 | 1.0 | | | | | 板目取り |
| 62 | 図 19 | 図版 17 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | 13.8 | 3.0 | * | | 70% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 杯 A |
| 63 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (15.0) | 2.2 | * | | 10% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 浅黄橙 7.5YR8/4 | 杯 A |
| 64 | 図 19 | 図版 17 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | 17.6 | 3.7 | * | | 50% | 密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 A |
| 65 | 図 19 | 図版 18 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | 18.8 | 3.9 | * | | 50% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 A |
| 66 | 図 19 | 図版 18 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (18.6) | 5.1 | * | | 25% | 密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 A |
| 67 | 図 19 | 図版 18 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (19.0) | 4.7 | * | | 25% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/8 | 杯 A |
| 68 | 図 19 | 図版 18 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | * | (4.2) | * | | 20% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 A 墨書「器」線刻 |
| 69 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (19.0) | 3.2 | * | | 10% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 灰黄 2.5Y7/2 | 杯 A |
| 70 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | * | (2.5) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR6/6 | 杯 A |
| 71 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | * | (3.5) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 褐灰 7.5YR5/1 | 杯 A |
| 72 | 図 19 | 図版 19 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | * | (2.3) | (13.5) | | 底部 50% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR7/6 | 杯 B |
| 73 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 蓋 | * | (2.1) | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 B 蓋 |
| 74 | 図 19 | 図版 19 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (12.8) | 3.5 | * | | 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 C |
| 75 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (16.4) | (2.4) | * | | 30% | やや密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 杯 C |
| 76 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (17.1) | 2.7 | * | | 20% | やや密 ～ 1mm 石英・長石 | 良 橙 5YR7/6 | 杯 C |
| 77 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (11.3) | 1.4 | * | | 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母 | 良 にぶい褐 7.5YR6/3 | 杯 H |
| 78 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (11.8) | (3.0) | * | | 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 にぶい黄橙 10YR7/3 | 杯 H |
| 79 | 図 19 | | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | * | (2.5) | * | | 体部片 | 粗 ～ 2mm 石英・長石・チャート | 良 にぶい橙 7.5YR7/4 | |
| 80 | 図 19 | 図版 19 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 | (7.2) | (9.2) | 0.7 | | 底部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母 | 良 橙 5YR6/6 | 墨書「木」 |
| 81 | 図 20 | 図版 19 | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | (17.0) | 2.3 | * | | 40% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 皿 A 墨書「越」 |
| 82 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | 21.6 | 3.0 | * | | 70% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石 | 良 橙 5YR7/6 | 皿 A |
| 83 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | (21.5) | 2.5 | * | | 25% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR6/6 | 皿 A 線刻 |
| 84 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | * | (1.9) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 にぶい褐 7.5YR6/3 | 皿 A, 黒漆塗付 |

## 表 10　報告遺物一覧（4）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構 層位 | 種別 器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 85 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | * | (2.6) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 皿 A |
| 86 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | * | (1.2) | * | | 底部片 | 密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 皿 A |
| 87 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | * | (2.6) | * | | 体部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい橙 5YR7/4 | 皿 B |
| 88 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 皿 | (19.4) | (1.4) | * | | 25% | やや密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい褐 7.5YR6/3 | 皿 H |
| 89 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 杯 or 皿 | (4.1) | (4.3) | 0.7 | | 底部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート | 良 にぶい褐 7.5YR6/3 | 墨書「木ヵ」 |
| 90 | 図 20 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 椀 | 12.3 | 3.6 | * | | 80% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR6/6 | 椀 C |
| 91 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 椀 | (12.4) | 3.4 | * | | 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 椀 C |
| 92 | 図 20 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 椀 | (12.8) | 4.6 | * | | 40% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 椀 C |
| 93 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 椀 | (13.6) | 4.2 | * | | 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 2.5YR6/6 | 椀 C |
| 94 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 椀 | (11.7) | 3.6 | * | | 10% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母 | 不良 橙 7.5YR7/6 | 椀 C |
| 95 | 図 20 | 図版 20 | SD001 下層 2 | 土師器 椀 or 杯 | (15.5) | 2.5 | * | | 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石 | 良 にぶい橙 5YR6/3 | |
| 96 | 図 20 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 高杯 | * | (1.7) | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 高杯 A |
| 97 | 図 20 | | SD001 下層 2 | 土師器 高杯 | * | (3.1) | * | | 脚・杯接合部 100% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 7.5YR7/6 | 高杯 A |
| 98 | 図 20 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 高杯？ | (21.1) | (2.5) | * | | 杯部 25% | やや密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 にぶい橙 5YR7/4 | |
| 99 | 図 21 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 鉢 | (14.4) | 4.8 | * | | 35% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/8 | |
| 100 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 鉢 | (22.2) | (4.2) | * | | 15% | やや密 ～ 2mm 石英・長石 | 良 にぶい橙 5YR7/4 | |
| 101 | 図 21 | 図版 22 | SD001 下層 2 | 土師器 鉢 | (25.7) | 7.3 | * | | 20% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR6/6 | 櫛刻 |
| 102 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 器 | (5.7) | (3.6) | 1.8 | | つまみ部片 | 密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい黄橙 10YR7/2 | 蓋蓋？ |
| 103 | 図 21 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 壺 | (7.6) | (4.5) | * | | 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい褐 7.5YR6/3 | 小型 |
| 104 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 甕 | (17.0) | (7.1) | * | | 口縁部 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい赤褐 5YR5/4 | |
| 105 | 図 21 | 図版 22 | SD001 下層 2 | 土師器 甕 | (18.8) | (10.3) | * | | 体部上半 25% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母 | 良 にぶい黄橙 10YR7/2 | |
| 106 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 甕 | (29.0) | (9.7) | * | | 体部上半 15% | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | |
| 107 | 図 21 | 図版 22 | SD001 下層 2 | 土師器 甕 | * | (9.8) | * | | 体部上半片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・雲母 | 良 灰白 7.5YR8/2 | |
| 108 | 図 21 | 図版 21 | SD001 下層 2 | 土師器 甕 | * | (6.7) | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート | 良 橙 5YR7/6 | |
| 109 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 鍋 | * | (7.8) | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/8 | |
| 110 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 甕 or 鍋 | * | (4.8) | * | | 把手 100% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石 | 良 にぶい黄橙 10YR7/2 | |
| 111 | 図 21 | | SD001 下層 2 | 土師器 甕 or 鍋 | * | (9.0) | * | | 肩部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 にぶい橙 7.5YR7/3 | |

## 表 11　報告遺物一覧（5）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構層位 | 種別器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | 図 21 | 図版 22 | SD001 下層 2 | 黒色土器 甕 | (12.4) | (3.6) | * | | 30% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母 | 良 黒 N2/0 | |
| 113 | 図 22 | 図版 22 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (13.7) | 3.4 | * | | 25% | やや密 微小砂粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 A |
| 114 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (13.7) | 4.3 | * | | 25% | やや密 ～ 1mm 石英・長石・雲母・黒色粒 | 良 灰白 2.5Y8/1 | 杯 A |
| 115 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (16.3) | 3.1 | * | | 10% | 密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰 N6/0 | 杯 A |
| 116 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (15.0) | 4.4 | (10.0) | | 25% | 密 ～ 3mm 石英・長石・チャート | 良 灰白 N7/0 | 杯 B |
| 117 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (15.8) | 4.2 | (10.8) | | 25% | 密 ～ 4mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | 杯 B |
| 118 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (15.8) | 5.0 | (11.3) | | 35% | 密 ～ 1mm 石英・長石 | 良 灰 N4/0 | 杯 B |
| 119 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (20.2) | 6.5 | 13.6 | | 50% | 密 ～ 1mm 石英・長石・黒色泥粒 | 不良 灰白 N8/0 | 杯 B 墨書「越」 |
| 120 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | * | (3.8) | * | | 体部片 | 密 ～ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒 | 良 灰 N6/0 | 杯 B |
| 121 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | * | (0.7) | * | | 底部片 | 密 ～ 1mm 石英・長石・雲母 | 良 灰 N5/0 | 杯 B 墨書「作ヵ」 または「麻ヵ」 |
| 122 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | (13.3) | 2.2 | * | | 35% | やや密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 B 蓋 墨書「越」 墨付着 転用硯 |
| 123 | 図 22 | 図版 23 | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | 15.7 | 2.9 | * | | 80% | 密 ～ 3mm 石英・長石・黒色泥粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 B 蓋 墨書「越ヵ」 |
| 124 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | (16.8) | 2.6 | * | | 15% | やや密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N8/0 | 杯 B 蓋 |
| 125 | 図 22 | | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | * | (1.3) | * | | 体部片 | やや密 ～ 3mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | 杯 B 蓋 |
| 126 | 図 22 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | * | (1.5) | * | | 口縁部片 | 密 ～ 1mm 石英・長石 | 良 灰 N6/0 | 杯 B 蓋 墨付着 転用硯 |
| 127 | 図 22 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 杯 | (22.4) | 4.4 | (16.7) | | 25% | やや密 ～ 2mm 石英・長石 | やや不良 灰白 N8/0 | 杯 L |
| 128 | 図 22 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 高杯 | * | (4.8) | (7.5) | | 脚部 75% | 密 ～ 3mm 石英・長石 | 良 灰白 N7/0 | 墨付着 転用硯 |
| 129 | 図 22 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 鉢 | (3.1) | (5.7) | 0.7 | | 体部片 | 密 黒色泥粒・微小砂粒 | 良 灰 N6/0 | 墨付着 転用硯 |
| 130 | 図 23 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | (12.2) | 4.5 | * | | 35% | 密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | 壺 A 蓋 |
| 131 | 図 23 | 図版 24 | SD001 下層 2 | 須恵器 壺 | (11.7) | (3.4) | * | | 口縁部 35% | 密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰 N6/0 | 壺 A |
| 132 | 図 23 | | SD001 下層 2 | 須恵器 壺 | * | (2.2) | * | | 底部 100% | やや密 ～ 2mm 石英・長石 | 良 灰白 N8/0 | |
| 133 | 図 23 | | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | * | (4.0) | * | | 体部片 | やや密 ～ 2mm 石英・長石 | 良 灰白 N7/0 | 壺蓋 |
| 134 | 図 23 | | SD001 下層 2 | 須恵器 甕 | (22.4) | (6.5) | * | | 口縁部 35% | やや密 ～ 5mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | |
| 135 | 図 23 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 須恵器 蓋 | * | (3.4) | * | | 35% | 密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒 | 良 灰白 N7/0 | つまみ欠損 |
| 136 | 図 23 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 須恵器 横瓶 | (11.8) | (6.9) | * | | 口縁部 25% | 密 ～ 1mm 石英・長石 | 良 灰白 N7/0 | 付着物 |
| 137 | 図 23 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 須恵器 横瓶 | * | (26.2) | * | | 体部片 | やや密 ～ 3mm 石英・長石・雲母 | 良 灰白 N7/0 | 付着物 |
| 138 | 図 24 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 製塩土器 | * | (8.4) | * | | 口縁部片 | 粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート | 良 灰白 7.5YR8/2 | |

## 表 12　報告遺物一覧（6）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構 層位 | 種別 器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 139 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (7.4) | ＊ | | 口縁部片 | 粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート | 良 にぶい黄橙 10YR7/2 | |
| 140 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (6.2) | ＊ | | 口縁部片 | 粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート | 良 灰黄 2.5Y7/2 | |
| 141 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (4.0) | ＊ | | 口縁部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート・雲母 | 良 にぶい黄橙 10YR7/2 | |
| 142 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (3.3) | ＊ | | 口縁部片 | 粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート・雲母 | 良 褐灰 10YR6/1 | |
| 143 | 図 24 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (3.4) | ＊ | | 口縁部片 | 粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート | 不良 橙 5YR7/6 | |
| 144 | 図 24 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (4.2) | ＊ | | 口縁部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石 | 良 灰白 7.5YR8/2 | |
| 145 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (3.6) | ＊ | | 底部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・チャート | 良 にぶい橙 5YR7/4 | |
| 146 | 図 24 | 図版 25 | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (3.5) | ＊ | | 体部片 | 粗 ～ 6mm 石英・長石・チャート | 良 橙 2.5YR6/6 | 布目痕 |
| 147 | 図 24 | | SD001 下層 2 | 製塩土器 | ＊ | (2.4) | ＊ | | 底部 100% | 粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・チャート・片岩粒 | 不良 明赤褐 2.5YR5/6 | 布目痕か |
| 148 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 柄杓柄 | (13.0) | 1.4 | 1.3 | | | | | 板目取り |
| 149 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 曲物底板 | (14.8) | (5.6) | 1.3 | | | | | 板目取り |
| 150 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 不明 | 19.0 | 2.7 | 1.6 | | | | | 板目取り |
| 151 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 不明 | (11.2) | 2.4 | 0.8 | | | | | 板目取り |
| 152 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 不明 | (13.7) | 1.3 | (0.9) | | | | | 柾目取り |
| 153 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 3.6 | 1.1 | 0.4 | | | | | 板目取り |
| 154 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 5.0 | 1.4 | 0.5 | | | | | 板目取り |
| 155 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 7.1 | 1.5 | 0.7 | | | | | 板目取り |
| 156 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 7.6 | 1.6 | 0.4 | | | | | 板目取り |
| 157 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 7.2 | 2.9 | 0.7 | | | | | 柾目取り |
| 158 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 8.4 | 1.3 | 1.0 | | | | | 柾目取り |
| 159 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 9.1 | 2.8 | 1.7 | | | | | 柾目取り |
| 160 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 9.3 | 0.7 | 0.6 | | | | | 柾目取り |
| 161 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 11.1 | 3.2 | 0.9 | | | | | 追柾目取り |
| 162 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 13.0 | 2.1 | 1.0 | | | | | 板目取り |
| 163 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 1.3 | 1.1 | 1.1 | | | | | 板目取り |
| 164 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 13.0 | 1.7 | 1.0 | | | | | 板目取り |
| 165 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 14.7 | 1.5 | 1.2 | | | | | 板目取り |
| 166 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 16.5 | 2.1 | 1.0 | | | | | 板目取り |

## 表 13　報告遺物一覧（7）

| 報告番号 | 挿図 | 写真図版 | 出土遺構 層位 | 種別 器種 | 口径（長） | 器高（幅） | 底径（厚） | 重 | 残存率 | 胎土・素材 | 焼成・色調 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 167 | 図 25 | 図版 26 | SD001 下層 2 | 木製品 燃えさし | 17.3 | 2.0 | 1.2 | | | | | 板目取り |
| 168 | 図 26 | 図版 27 | SE003 石組埋土 | 土師器 皿 | 8.2 | 1.6 | * | | 100% | 密 微小砂粒 | 良 浅黄橙 7.5YR8/4 | |
| 169 | 図 26 | 図版 27 | SE003 石組埋土 | 土師器 皿 | 8.3 | 1.2 | * | | 70% | 密 ～ 1mm 石英・長石・雲母・チャート | 良 灰白 7.5Y7/1 | |
| 170 | 図 26 | | SE003 掘方埋土 | 土師器 椀 | * | （3.4） | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母 | 良 にぶい橙 7.5YR7/4 | 椀 C |
| 171 | 図 26 | | SE003 掘方埋土 | 瓦器 椀 | * | （3.9） | * | | 口縁部片 | 密 ～ 1mm 石英・長石 | 良 暗灰 N3/0 | |
| 172 | 図 26 | 図版 27 | SE003 掘方埋土 | 瓦器 椀 | （15.8） | （4.7） | * | | 25% | 密 微小砂粒 | 良 灰 N5/0 | |
| 173 | 図 27 | 図版 27 | SK006 曲物内埋土 | 土師器 杯 | （21.4） | 4.8 | （16.6） | | 10% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 橙 5YR7/6 | 杯 B |
| 174 | 図 27 | | SK006 上面検出 | 土師器 皿 | * | 2.5 | * | | 体部片 | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 浅黄橙 7.5YR8/4 | 皿 A |
| 175 | 図 27 | 図版 27 | SK006 掘方埋土 | 土師器 鉢 | （19.8） | （5.7） | * | | 10% | やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫 | 良 にぶい橙 5YR6/4 | |
| 176 | 図 27 | | SK006 曲物内埋土 | 土師器 甕 | * | （2.4） | * | | 口縁部片 | やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・チャート | 良 にぶい橙 7.5YR7/3 | |
| 177 | 図 27 | | SK006 曲物内埋土 | 須恵器 壺 | * | （3.3） | （9.6） | | 底部 20% | やや密 ～ 3mm 石英・長石 | 良 灰 N4/0 | |
| 178 | 図 27 | | SK006 | 木製品 曲物 | （72.7） | （23.3） | 72.5 | | | ヒノキ | | 板目取り |
| 179 | 図 28 | | SP008 埋土 | 瓦器 椀 | * | （3.2） | * | | 口縁部片 | 密 微小砂粒 | ややそ良 灰 N4/0 | |
| 180 | 図 29 | | 不明 | 黒色土器 椀 | * | （1.7） | （7.1） | | 底部 25% | やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫 | ややそ良 橙 5YR6/6 | A 類 |

数値の単位は法量 cm、重量 g

## 表 14　検出遺構および出土遺物一覧

| S 番号 | 遺構番号 | 層位 | 種別 | 所見 | 出土遺物 | 地区 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SD001 | 上層 | 落ち込み | 上～中層は土壌化<br>下層はグライ化が顕著<br>奈良時代の大量の遺物が出土 | 土師器（古代）皿・甕・釜、土師器（中世～）皿・鍋、須恵器（古代）甕・瓶、須恵器（中世～）甕、緑釉陶器椀、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢、輸入白磁椀、国産陶器瓶、砥石、平瓦・丸瓦、杭・不明木製品、炭 | H ～ M1 ～ 6 |
| | | 中層 | | | 土師器（古代）皿・甕、須恵器（古代）椀・甕・瓶、黒色土器 A 類椀・B 類椀、瓦質土器釜、瓦質土器鉢、不明木製品 | |
| | | 下層 | | | 土師器（古代）椀・皿・杯・鉢・甕・高杯・釜、須恵器（古代）杯・甕・瓶、製塩土器（古代）、杭・柄杓・燃えさし（5 点）、釘 | |
| | | 下層 2 | | | 土師器（古代）椀・皿・鉢・甕・皿（墨書）・釜、須恵器（古代）椀・皿・杯・杯（墨書）・鉢・壺・甕・高杯・蓋・蓋（墨書）、製塩土器（古代）、柄杓・杭・燃えさし（111 点）、桃種・骨 | |
| 2 | SD002 | | 落ち込み | 自然流路、一部湧水もみられる | 土師器（古代）甕、瓦器椀、国産陶器甕・鉢・瓶 | P・Q2・3 |
| 3 | SE003 | 石組内 | 井戸 | 石組井戸、S-1 内もしくは上面 | 土師器（中世～）皿、須恵器（中世～）甕、瓦器椀 | M2 |
| | | 掘方 | | | | |
| 4 | SK004 | | 土坑 | グライ土壌の方形プラン | 土師器（中世～）釜、瓦器椀 | J3・4 |
| 5 | SK005 | | 土坑 | グライ土壌の方形プラン | | I3 |
| 6 | SK006 | 曲物内 | 土坑 | 曲げ物が据えられる、湧井？ | 土師器（古代）皿・杯・甕、須恵器（古代）甕・瓶、製塩土器（古代）、曲物・燃えさし（2 点）、種 | L5 |
| | | 掘方 | | | | |
| 7 | SP007 | | ピット | ピット、S-1 上層 | | L3 |
| 8 | SP008 | | ピット | ピット、S-1 上層 | 土師器（古代）皿、黒色土器 A 類椀、瓦器椀 | J2 |
| 1 区　表土　遺構検出不明 | | | | | 土師器（古代）甕、土師器（中世～）釜、須恵器（古代）甕、黒色土器 A 類椀、瓦器椀、国産染付椀、平瓦 | |
| 2 区　表土 | | | | | 土師器（中世～）皿、須恵器（古代）蓋 | |

# 写真図版

調査区全景空中写真（上が北）

1 区全景空中写真（上が北）

図版 2

調査前風景（北から）

1 区調査区設定状況（南から）

SD001 検出状況（北から）

SD001 検出状況（西から）

図版 4

SD001 南壁土層断面（北から）

SD001 西壁土層断面（東から）

SD001 下層確認トレンチ全景（北から）

SD001 下層確認トレンチ北壁土層断面（南から）

図版 6

SD001 下層確認トレンチ西壁土層断面（東から）

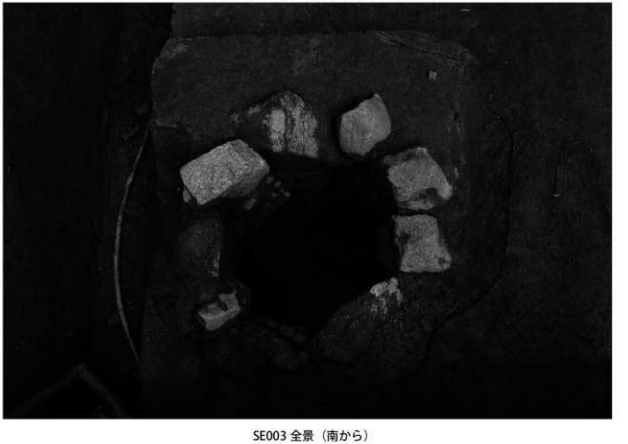
SD001 下層確認トレンチ北壁東側土層断面（南から）

SD002 検出状況（南から）

SD002 南壁土層断面（北から）

図版 8

SE003 検出状況（南から）



SE003 全景（南から）

SE003 石組南側（北から）

SE003 石組断ち割り（南から）

図版 10

SK004 土層断面（南から）

SK004 完掘状況（南から）

SK005 土層断面（南から）

SK006 曲物検出状況（北から）

図版 12

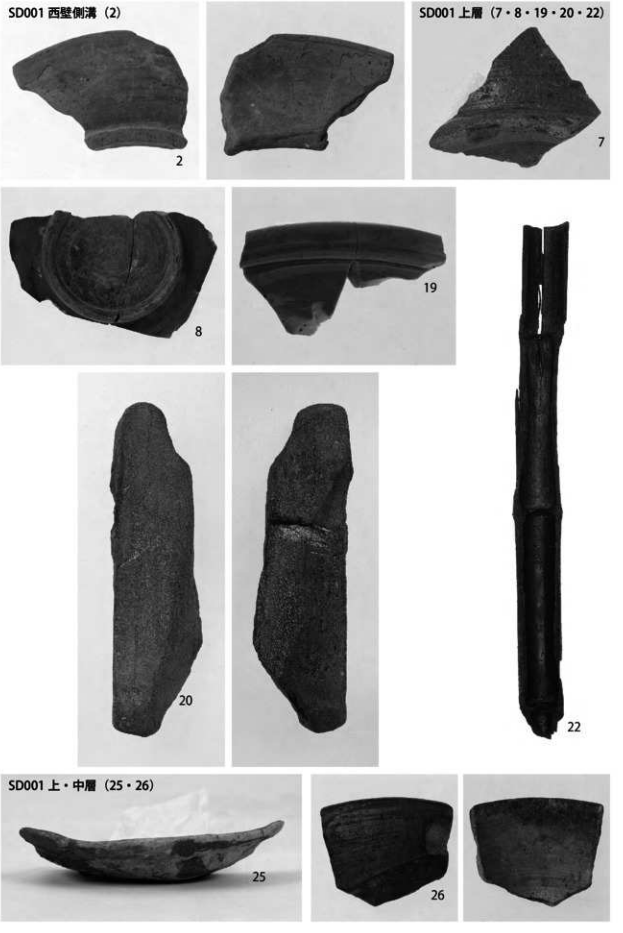
SK006 曲物内堆積状況（東から）

SK006 掘り下げ状況（北から）

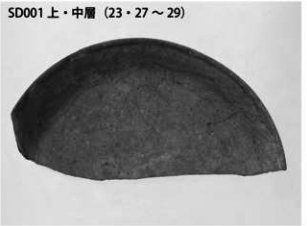
SK006 掘り下げ状況（北東から）

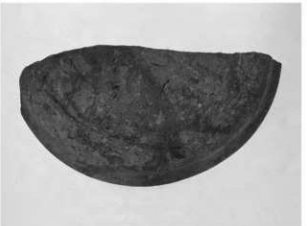
SP008 土層断面（南から）

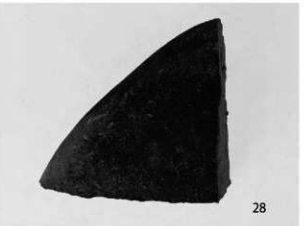
図版 14


SD001 西壁側溝（2）
2
SD001 上層（7・8・19・20・22）
7
8
19
20
22
SD001 上・中層（25・26）
25
26

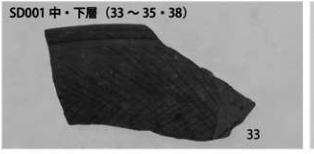
SD001 上・中層（23・27 ～ 29）







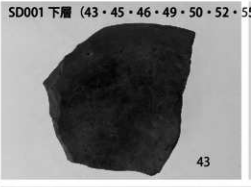
図版 16


SD001 中・下層（33 ～ 35・38）
33

34

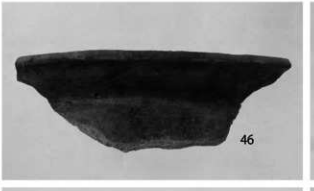
35

38


SD001 下層（43・45・46・49・50・52・55）
43

45

55

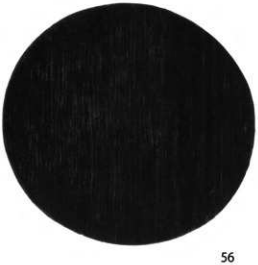

46

49

50

52

SD001 下層（56 ～ 58）

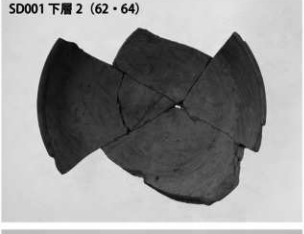


56

57

58

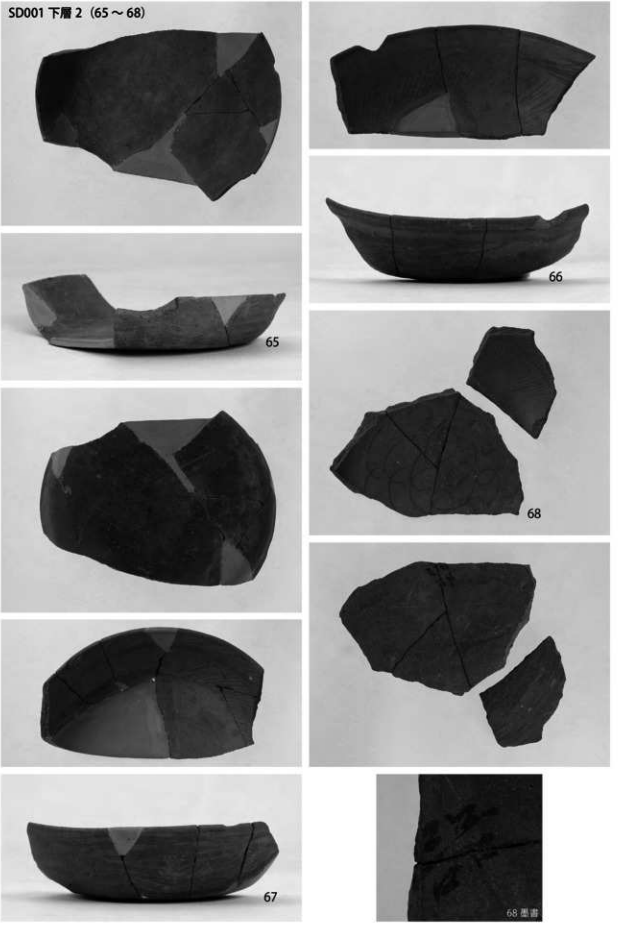
SD001 下層 2（62・64）



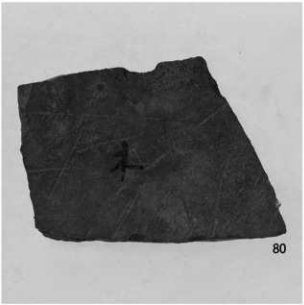
62

64

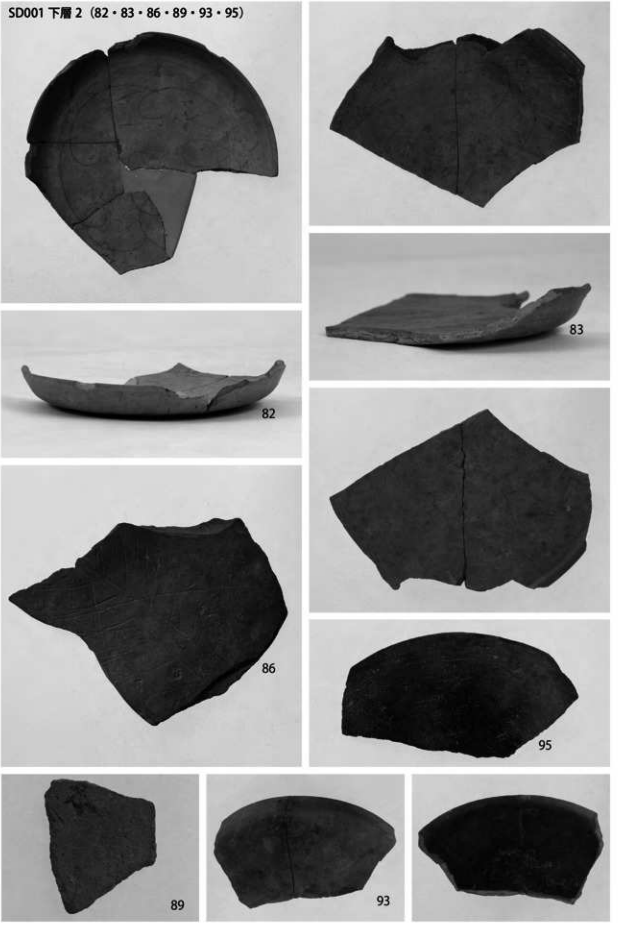
図版 18



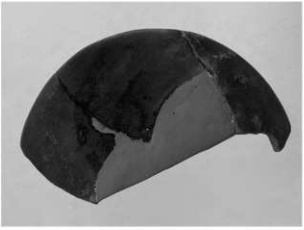
SD001 下層 2（72・74・80・81）

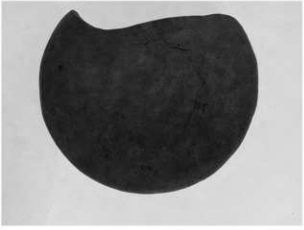


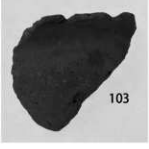
図版 20

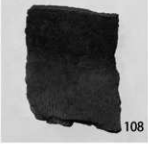


SD001 下層 2（90・92・96・98・99・103・108）



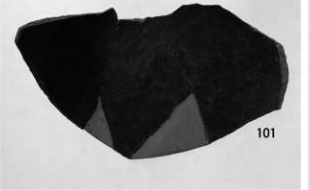


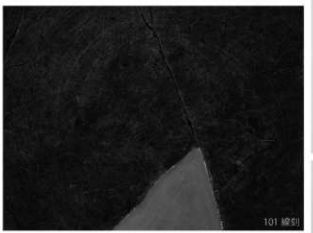


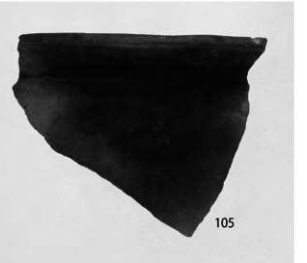



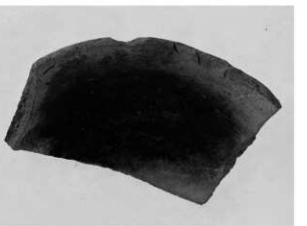
図版 22

SD001 下層 2（101・105・107・112・113）

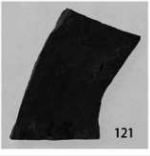


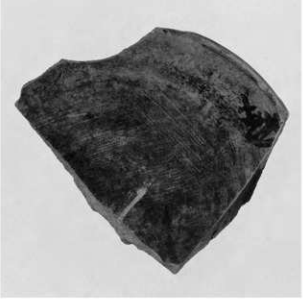






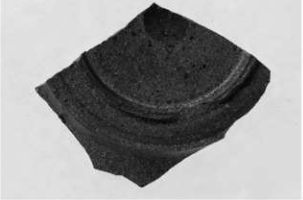
SD001 下層 2（115・118・119・121～123）

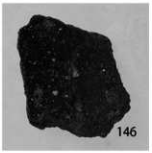




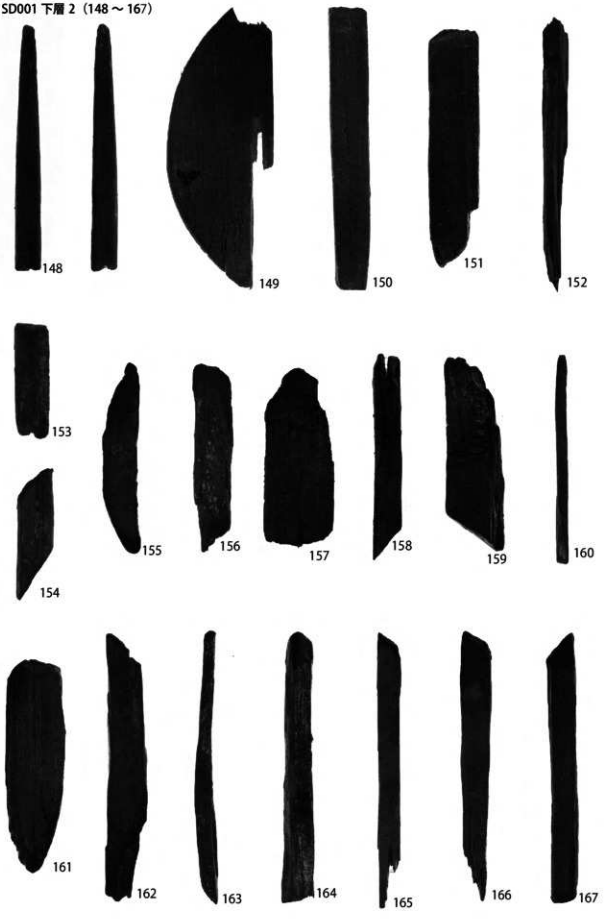
図版 24

SD001 下層 2（135～138・143・144・146）



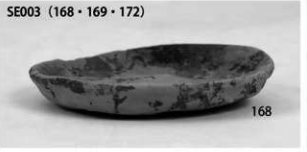


SD001 下層 2（148 ～ 167）

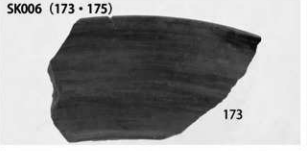


SD001 下層 2（曲物片）

SE003（168・169・172）



SK006（173・175）



# 報告書抄録

| | | | |
|---|---|---|---|
| ふりがな | おちいせき | | |
| 書　　名 | 越智遺跡 | | |
| 副 書 名 | 令和３年度発掘調査報告書 | | |
| 巻　　次 | | | |
| シリーズ名 | | | |
| シリーズ番号 | | | |
| 編 著 者 名 | 瀬戸哲也、バンダリ・スダルシャン、三谷智広、藤根 久、木沢直子 | | |
| 編 集 機 関 | 公益財団法人 元興寺文化財研究所 | | |
| 所　在　地 | 〒630-8392　奈良市中院町 11 番地 | | Tel 0742-23-1376 |
| 発行年月日 | 西暦　2023 年３月 31 日 | | |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北 緯 | 東 経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所 在 地 | 市町村 | 遺跡番号 | °′″ | °′″ | | | |
| 越智遺跡（おちいせき） | 奈良県高市郡高取町与楽（ならけんたかいちぐんたかとりちょうよらく）1160 番地 | 294012 | | 34°<br>27′<br>54″ | 135°<br>46′<br>40″ | 20210825<br>/<br>20211015 | 584㎡ | 病院<br>改築 |

| 種 別 | 主 な 時 代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特 記 事 項 |
|---|---|---|---|---|
| 集落跡・<br>その他 | 奈良時代<br>中～近世 | 落ち込み・溝<br>井戸<br>土坑<br>ピット | 土師器<br>須恵器<br>製塩土器<br>瓦器<br>陶磁器<br>木製品<br>石製品<br>獣骨<br>種子 | 奈良時代の「越」「器」などと記された墨書土器が出土 |

| | |
|---|---|
| 要　約 | 越智遺跡は貝吹山南麓の尾根先端に位置し、越智谷と称される平野部に南面している。遺跡周辺は、『万葉集』では「越智野」などと称された地域ともされ、天皇や皇子などの墓とされる終末期古墳が分布している。今回の発掘調査では、奈良時代に遡る落ち込み、中世の井戸・土坑・ピット、中～近世の溝が検出された。特に、落ち込みからは大量の奈良時代の遺物が出土し、「越」「器」などと記された墨書土器、製塩土器、曲物・柄杓・独楽状木製品・燃えさしなどの木製品が出土した。落ち込みは、幅 24 m、深さ２m以上の規模を有し、グライ化が顕著であることから、溜池などの可能性もあるが全容は不明である。出土遺物から官衙的な性格も想定されるが、遺構の様相が明確ではないことから、遺跡の性格・評価を確定するには時期尚早と思われる。しかしながら、本遺跡が所在する大和盆地南部では奈良時代の遺跡が少ないことから、当時の交通路、国府などとの関係を考える上で貴重な成果である。 |

越智遺跡
－令和３年度発掘調査報告書－

2023.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）共同精版印刷株式会社